

薔薇のリース

森本洵司

(人物)

ローズ
ローザ
ロレンソ
ドラ
少年 a
ケワイ
コロモ
ピアノ弾
ホセ
ミリア
イリス
チタ
クリステイネ

・ 老兵
・ ビルのオーナー
・ 支配人

ダビド
ハイメ
ファビアン
フリア

女 1
女 2
市民兵 1
市民兵 2
女たち
男たち

・ フランス兵たち
・ 男 1、男 2、男 3、男 4

(舞 台 装 置)

出来るだけ装置を排したオープンステージ。
3つのエリアに分かれる。ビクトリアの街、パレス・オブ・ローズ、奥に上下手を横断で
きる通路。

パレスローズの柱部分が、ビクトリアでは教会の塔となり、上部が十字架に見える仕掛け。

※(1)※

○パレス・オブ・ローズ

オープニングイントロのピアノが繰り返される。

溶明してはいくが薄暗い。

焚かれたスモッグに幾筋かの照明。

その光が中央に注がれている。

ステージであることが分かる。

ステージから離れてロングソファードローテーブル。

ピアノ弾きがくわえ煙草で演奏している。

下手側のバーカウンターにコロモの姿。

ここがサロンであることが分かる。

コロモは時折、照明と音響装置をパソコンで調整している様子。

照明、CHANGE(ステージ用)。

ローズが中央に浮かび上がる。

同時に歌、START。

(涙は月にならないの)

「♪涙なんて見せないわアタシ

星ふる街の片隅で

流れる景色に時代感じて

なくした時がふいによぎっても

ぼんやり窓を眺めるだけ

悲しくなんかなかった

涙なんて見せるのは

生き方じゃない

そう思ってるわ アタシ

涙は月にならないの

愛した日でもならないわ

ましてや星になるなんて

恰好だけなら許して

心に深く落ちるのよ涙は La...La...La...

涙なんて見せないわアタシ

つめたく深い夜の闇

通りすぎた人思い出しても

すれちがった風の匂いさえも

ガラスの底にしずめるだけ
物憂いなんかなかった
いとしい人はとおくへ
それでいいじゃない
そう思ってるわ アタシ

涙は月にならないの
愛した日でもならないわ
ましてや星になるなんて
恰好だけなら許して

心に深く落ちるのよ涙は La…La…La…」

照明、CHANGE。

ケワイ、飛び込んでくる。

ケワイ 「ローズさん！」

息を切らし、明るい表情はない。

ローズ、一瞬視界に入れるが、表情を変えずソファ―に座る。

ローズ 「お水をちょうだい、コンガスで」

コロモ 「はい」

ケワイ、ローズの元に駆け寄る。

ケワイ 「(頭を下げ、肩を落としている) すみません…！」

ローズ 「可哀想に。ひどい汗」

ケワイ 「何度もお願ひしてみたんですけど…」

ローズ 「分かってる」

ケワイ 「聞いてもらうどころか、あの人たち会ってくれさえ」

ローズ 「ええ」

ケワイ 「仕方がないんでアタシ、調べてオフィスまで行ったんだけど」

ローズ 「そうなの」

ケワイ 「このビルの取り壊しに変更なしの一点張りで…！」

コロモ、炭酸水(カブレイロア)を運んでくる。

ローズ 「ありがとう」

コロモ、ケワイに手を貸し、起き上がらせようとしてやる。

ケワイ 「やっぱり、あの銀行の人にもう一度…！」

ローズ 「もういいわ」

ケワイ 「しかし！昨夜のライブ、あんなに観客が集まって！このサロンにも入りきらなかったくらいに」

ローズ 「行ったところで同じことだから」

ケワイ 「…」

ローズ 「あなたのせいじゃない」

ケワイ 「だったら、他に心当たりは。今からでもアタシ、どこへだって…！」

ローズ 「お願い。この子にもお水。あなた炭酸入れる」
ケワイ 「ローズさん！」

ローズ 「シンガスで」

コロモ 「はい」

ケワイ 「…」

コロモ、ケワイの肩を抱いてカウンターへ誘う。

ピアノ弾 「ローズ、最後の曲は今のままで」

ローズ 「ええ、いいわ。これで行きましょ」

ピアノ弾 「OK」

ピアノ弾き、ピアノの横にあるギターを手にして鳴らし始める。

ここでは彼は、気分のままにギターを弾いたり、

ピアノを弾いたりするらしい。

ローズ 「すぐにCDに落とせるのよね」

コロモ 「はい、それは」

ローズ 「支配人を入れた人数分だけ。ここだけの限定レベルよ。私から最後まで残っ

てくれたみんなへの贈り物」

コロモ 「準備します」

ローズ 「やっぱり私、ダウンロードよりこれ。時間がたてば愛着沸くもの。レコード時

代も知っているけど、まさかそれはね」

ケワイ 「(席から立ち上がり) 支配人はどこへ！？アタシ、彼女ともう一度話を」

コロモ 「落ち着きなさいって」

ケワイ 「落ち着いてなんかいらんない！」

ピアノ弾 「大きな声」

ケワイ 「だって！この店が…パレス・オブ・ローズがなくなるなんて！」

ローズ 「(耳に入らぬかのように水を口にしている)…」

間。

ケワイ 「(涙声) 再開発だなんて…思い出さずと潰されて…」

コロモ 「アンタの気持ち、分かっているから」

ケワイ 「いつも来る…あのオーナーのじいちゃん。街からビルにお金が入ったって。こ

れで借金が返せるって泣くのよ。何にも言えなくなっちゃう…」

ローズ、席を立ち、ケワイの側に。

ローズ 「ありがとう。そういう優しいあなたが好きよ。でもね、あの人悪く言わないで。

デビューからの付き合い。そんな人、もうあの人とうちの支配人くらい。昨夜

のようなステージが毎晩だった時代、一番に喜んでくれた人」

ケワイ 「だけど…だけど…(泣)」

ローズ 「今回だって、返って来る保証金に上乗せを。だから、あなたたちにいくらか

も渡せたのよ」

ケワイ 「私たちにそんな気遣いなんて。それに、そもそもが立退きなんだから…恩着せ

がましいじいさんね」

コロモ 「そう邪険に言わないの」

ケワイ 「いつだって調子いいのよ。あのハゲチャビン…」

ローズ 「昨夜はお別れの集まり。昔からのファンもそれを分かっていたはず。みんな、

この店の陰りと長年の赤字が透かして見えてたのよ。新聞でさえ、最後だけは盛り上げて書いてくれた。伝説の歌姫だなんて」

間。

ローズ 「ビッグバンド・オーケストラ知ってるわね」

コロモ 「もちろん」

ローズ 「バンマスとは話がついてる。すぐにでもスタッフに入れたらいい。もちろん、あなたたち次第ということはある」

ピアノ弾 「いつそんな話を」

ローズ 「実際に話が出来たのは、やっぱり昨夜。客席にいたでしょ。楽屋へ来てくれた」

コロモ 「その話を」

ローズ 「心残りはそれだけだもの」

ケワイ 「あなたは。ローズさんはどうするんです」

ローズ 「この建物、イコール、歌手手ローズ。どちらが欠けても私じゃない」

ケワイ 「そんな」

ローズ 「いいの。手放すことは決めたんだから。潔くなれないの嫌いよ、私」

ローズ、店内を歩き出す。

ローズ 「いよいよ最後ね。この建物の歴史も終わる。どこもかしこも思い出が詰まって」

ローズ、柱に掛かった装飾のリースの前で足を止める。

ローズ 「これだけは持ってくわ。このリース。一寸、旅にはかさばるけど」

コロモ 「旅に」

暫し、リースを見つめて。

ローズ 「夢をね、見るのよ。このところ」

コロモ 「夢…ですか」

ローズ 「一寸、不思議なんだけど。決まって同じ夢をね、毎晩。まるでデジャヴみたく。とても遠い風景。行ったこともない街。でも、よく知っているような。どこか異

国の…古い街。気になるの。そこにね、これとおんなじ飾りが」

コロモ 「前から聞こうと思ってたんです。その装飾細工」

ローズ 「薔薇よ。色はだいたいぶ落ちているけど赤の薔薇。伝説なの」

コロモ 「伝説」

ローズ 「どこかの国の言伝え。時を越えて伝わった」

コロモ 「どんな話です」

ローズ 「街で評判の歌手のものだって」

コロモ 「歌手の」

ローズ 「ジプシーだか、踊り子だか。今じゃ誰にもわからない。ただ、分かっているのは、ある時期ある街で、このリースだけがすべての恋人たちを見守ったってこと」

コロモ 「恋人たちを」

ローズ 「幸運と不滅のシンボルだって。支配人が見つけて来たの。初めてのツアーへ出

た先で。街の外れの骨董品屋。入るなり目に飛び込んできたらしいわ」
ケワイ 「昔からそうなのか。ツアーに出たら、みんな時間に追われて仕事してらっいてい
うのに、肝心な時に一人ふらふら。あのオバサンときたら」

コロモ 「今日はアンタ、誰でも彼でも気に食わないのね」

ケワイ 「だってさ」

ローズ 「いつそ探してみようかなんて。その街。伝説の恋物語を追って」
間。

ピアノ弾 「デジャヴ…か。不思議だな、そりゃ」

ケワイ 「何」

ピアノ弾 「いや、夢がね」

ケワイ 「夢がどうしたのさ」

ピアノ弾 「いやね。その夢、俺も見るからさ。確かにこのところ」

ローズ 「ホント」

ピアノ弾 「ああ。ローズから聞くまでは大して気にもしてなかったがね」

コロモ 「変なこと言うようだけど」

ケワイ 「何さ」

コロモ 「実は…私も。偶然なのこれ」

ケワイ 「アタシに聞くない」

コロモ 「アンタは」

ケワイ 「アタシは…あれ。忘れちゃってるのかな」

コロモ 「アンタはないのね」

ケワイ 「(少し焦り) どうしてだろ」

ローズ 「…あの一面、赤土の街。あれは一体、どこなのかしら」

少年 a 、登場。

あどけない学生帽姿、右眼を眼帯で覆っている。

少年 a 「こんにちは」

コロモ 「誰…」

ケワイ 「子供じゃないの。コラ…どこから入って来た」

少年 a 「ここに違いないと言うもんだから」

コロモ 「誰かに言われて来たの」

少年 a 「ええ。右眼に。僕のこの眼帯の下の」

ケワイ 「右眼…」

少年 a 「(ローズを見つけ) あなたです!」

少年 a 、ローズに駆け寄る。

ケワイ 「(制して) オイオイ。気安く近づいちゃ!」

少年 a 「やっと巡り逢えた。僕はあなたを探していたんです」

コロモ 「ローズさんを」

少年 a 「そうです。あなたです。ずっとです」

ローズ 「ずっと」

少年 a 「はい。正確には僕の右眼が。(リースに走り) その薔薇!」

ケワイ 「おい、一寸待ってっ！」

少年 a 「昨日、街角で大人が広げた新聞に、あなたの記事が。このリースと一緒に」

コロモ 「ラストステージの記事ね」

少年 a 「瞬間、僕は分かったんです。あなたに間違いないって。右眼が騒ぎ出しました」

ローズ 「あなたとどこかで会ってるのかしら。以前、どこかで」

少年 a 「そうなんです。遠い昔に」

ケワイ 「遠い昔って、アンタ、まだ子供じゃない」

少年 a 「今の僕は子供でも、右眼の記憶は遠い過去です。僕の右眼は長い旅をしてきました。随分、長い道のりです。何度か生まれ変わっての旅なんですから。やっとたどり着きました。見えるんです。僕のこの右眼にだけは」

ケワイ 「何が」

少年 a 「どこかの国の風景。ずっと昔の」

間。

コロモ 「風景」

ローズ 「もしかして…それは赤い風景」

少年 a 「そうです。赤い土に覆われた。そんな街です」

ローズ 「大勢の人を見送って」

少年 a 「ええ。そして、一人をずっと待ちます」

コロモ 「ローズさん」

少年 a 「そこには赤い風景が見えるんです。ずっと昔の。ずっと遠くの、どこかの国で。いつかどこかで会えると誓った人を探しています。僕の右眼は探し求めたその人の生まれ変わりで。僕の右眼は遥か昔の、彼の右眼の生まれ変わりで。す。そして、やっと巡り合えました。今、僕の目の前にいるあなた。僕の右眼は昔のあなたの心の友です」

ローズ 「私の夢と同じ。その景色の中を」

少年 a 「これです。この赤いリースがあったでしょう。ここにあるのは偶然じゃない」

ローズ 「偶然じゃない…」

少年 a 「だって、渡るべきところにちゃんとたどり着いてる」

コロモ 「それがローズさんのところだと」

少年 a 「小さい頃から何度も夢に出てきました。でも、その頃はまだ、断片的でおぼろげだったんです。だけど、最近なって頻繁に出て来るように。はつきりと、昼も夜も関係なく。現実も夢も関係なくです。周りの大人からは変わった子供と言われました。でも、僕にはコントロールできません。ただ、洪水のように流れて来る映像を拾い集めるだけです。しかも流れてくるのは映像だけではありません。感じるんです。右眼からの伝言を」

コロモ 「伝言」

少年 a 「そうです。彼のメッセージです」

ローズ 「彼」

少年 a 「そう、彼。ロレンソの」

ローズ 「ロレンソ…」

少年 a 「そうです。彼がこの眼の持ち主です。記憶にありませんか」
ローズ 「記憶と言われても…」

少年 a 「想像してみてください。きっと浮かんでくるはずです。僕たちは繋がっているんですから」

ローズ 「繋がって…」

少年 a 「過去とあなたの時間の糸が。僕の右眼がそう言っています」

ローズ 「私、気になってた。夢なのに夢じゃない、そんな気がしてたから。夢の中に出て来る沢山の景色や人々。その中でも一人、気になる人が。とても痩せた小さな青年」

少年 a 「気になるはずです。それが彼からのメッセージなんですから。夢を通してロレンスは逢いに来てるんです。あなたに」

ローズ 「でもその夢、いつだって遠くて聞こえない」

少年 a 「それを僕が伝えます。僕だって全部を理解しているわけじゃ。僕だって知りた。い。謎なんです。見えてることはみんな伝えますよ。そのために僕は受け継ぎました。この右眼を」

ローズ 「あなたには聞こえるの」

少年 a 「はい。聞こえます。そして見えます。異国の地で、彼はずっと待っていたんです、この時を。知っていますか。この赤いリースは彼が作ったものなんです」

ローズ 「この薔薇に何か意味が」

少年 a 「もちろん。その当時、あなたが受け取ったものです」

ローズ 「私が」

少年 a 「薔薇はあなたの象徴ですから。あなたの呼名は当時、街中に知れ渡ってました」

ローズ 「私の呼名」

少年 a 「思い出しませんか。ディーバ・ローサ」

ローズ 「ローサ」

少年 a 「そうです。あなたは昔、薔薇の歌姫と呼ばれていたんです！」

大音響で流れるコーラスイントロ。

照明、CHANGE。

灼熱の街が変わる。

ローズ、ストップモーション。

スタッフ達、退場していく。

○教会前の広場

中央へスローモーションのように次々に現れる 男たち。

街の馬車職人たちである。

職人たち 「Ah〜…Ah〜…ローサ…ローサ…ローサ…ローサ…」

ローサのシルエット、登場。

一定のリズムをもって手拍子。

それと共に、バラバラだった動きが踊りに変わっていく。

ローサの踊り始まり、男たちの輪の中へ。

(愛して)

♪沈みいく 輝きの 地平線よ

黄金の光さえ まだ燃えさかる

灼熱の太陽が あなたつつんで

私もうくぎづけなの 情熱のまま

その手に 抱かれる 熱い吐息もれ

日が落ちたわ さあ始まる

愛して 好きだけ

感じる ころろ 躍らせ

愛して ほしいがまま

El suelo rojo que sonrie (微笑むの 赤い大地が)

流れいく 星の夜 時が過ぎて

言葉などいらぬわ まだ燃えさかる

ほとぼしる汗の肌 ふたりつつんで

私もうくぎづけなの 情熱のまま

どこまで 行くのか 分からぬふたりに

はげしい鼓動の 音きこえる

愛して 好きだけ

わたしの ころろ とかして

愛して ほしいがまま

El suelo rojo que sonrie (微笑むの 赤い大地が)

愛して 好きだけ

感じる ころろ 躍らせ

愛して ほしいがまま

El suelo rojo que sonrie (微笑むの 赤い大地が)]

一同の動き、一斉にSTOP。

演奏だけは続いている。

ローサ

「私が初めてあの人を見たのは、忘れもしないフェスタの夜。一目見た途端恋に落ちたわ。どこからか流れ着いての canta オール(唄歌い)。生 まれついでのフェロモンとオーラ。浅黒い肌で私を溶かすの。彼の名はエドムンド。私の胸を焦がす愛しい男。百万回のキスを贈るわ。あの人旅立った戦 場に向かっ」

一同の動き、戻る。

ローズ、静かに退場。

「♪愛して 好きナだけ

感じる ころろ 躍らせ

愛して ほしいがまま

El suelo rojo que sonrie (微笑むの 赤い大地が)

愛して 好きナだけ

わたしの ころろ とかして

愛して ほしいがまま

El suelo rojo que sonrie (微笑むの 赤い大地が)

馬車職人の男たち、口々にローサへ歓声を上げる。

ホセ 「ローサ、もう一度、踊ってくれよ。別れの門出に」

ダビド 「ローサ、お願いだ。僕と最後に」

ハイメ 「ローサ、この街の女神。こっちを向いて」

ローサ 「私を誰だと」

男たち 「ローサ！」

ローサ 「私を誰だと」

男たち 「薔薇の歌姫！」

ローサ 「私のことなら何でも知ってる」

男たち 「もちろん何でも知ってる！」

ローサ 「どんな些細なことでも」

男たち 「もちろん何でも知ってる！」

ローサ 「それなら私が誰を愛しているのかも」

男たち 「(がっかりした声) Oh…」

ローサ 「私が愛するのはエドムンド」

男たち 「Oh…」

ローサ 「この街で最初の志願兵。正義と勇気のある男」

男たち 「(やけ気味) Oh・Oh」

ローサ 「それにアンタ達にはいるじゃない。別れを惜しむ恋人たちが」

街の女たち、それぞれの恋人の名を呼び、登場。

男たち、それぞれの恋人に向かい、カップルが出来ていく。

ミーア 「ホセ！いい年してあんたって人はどうだろうね」

ホセ 「ぎゃあぎゃあ騒ぐなみつももない。神聖なる旅立ちの朝に」

ミーア 「何が神聖だか！ホンと幾つになっても男ってのは。ダビド！ハイメ！アンタ達

まで。うちの娘をほっぽり出して、大事にしないなら返してもらおうよ」

イリス 「そうよ。お母ちゃん、もって言って」

チタ 「もって言ってよ、お母ちゃん」

ダビド 「いやあ…俺たちはただ」

ハイメ 「ホセの親父さんにつき合ってただけで」

ホセ 「汚ねえぞ、手前らコノ野郎」

クリステイネ 「お母ちゃんてば、私、大事な話が」

遠くで響くラツパの音。

ローサ 「そら、時を知らせるラツパが鳴った。もう一度鳴ったら、街の通りに集まる合
図よ」

恋人たち、別れを惜しんでの抱擁し合う。

ロレンソ、薔薇のリースを持ち、登場。

ローサに近づきたいが、人の群れでままならない。

ロレンソ 「ローサ！ローサ」

ローサ 「誰」

ロレンソ、人の群れから抜け出てきて。

ロレンソ 「僕だよ、ローサ」

ローサ 「ああ、ドラのところの」

ロレンソ 「ロレンソだよ。ロレンソ。僕の名前はドラのところの兄貴じゃない」

ローサ 「後で寄ろうと思っていたの。ドラはどこ。今日こそはエドムンドのことを占っ
てもらいに」

ロレンソ 「占いは後回しだよ、ローサ。何しろ僕はもう行くんだから」

ローサ 「みんなと格好が違うのね。アンタも招集を」

ロレンソ 「僕の本業は装飾工芸だけれど、鍛冶屋や鋳掛屋だってヒターノはみんな馬車職
人でひとくくりさ。そのかわり、僕は教会の修繕部隊に手を挙げた」

ローサ 「教会。アンタいつからプライソ信者に」

ロレンソ 「修繕部隊は巡礼の部隊さ。行く先々で聖書を読む人間が必要でね。僕は読み書
きできるからすぐに決まった。あの仕事なら工芸の腕も落ちやしない」

ローサ 「こんなにみんなが血を熱くさせてる時に。アンタ一人、戦争とは無関係」

ロレンソ 「最終はサンティアゴ・コンポステイラへ。星が導くという伝説を頼りに。守
護聖人だよ。この戦いだって守ってくたさる。だから、無関係じゃないだろう」

ローサ 「でも、戦場を避けて通ることに違いはないわけよね」

ロレンソ 「いくらスペイン軍が優勢で勝てや騒げの大賑わいだからって、本当のところ、
僕にはどうして皆が出征を喜ぶのか理解できないね。軍隊は苦手さ。堅苦しく
って、何でも強制されて。きつと三時のおやつも許可がある」

ローサ 「(背を向け) どうやら戦場を遊び半分と考えているようね」

ロレンソ 「(リースを差し出し) 兎に角、見てくれよ。君のために仕上げたんだ」

ローサ 「薔薇の細工ね」

ロレンソ 「君のためにさ、ローサ。この辺なんかとっても細かく装飾を」

ローサ 「確かにいい腕してる。でもね (リースを返す)」

ロレンソ 「聞いてよローサ。僕はね、きつといつか最高級のランドーの馬車を君に贈るよ。

僕が細部にまで装飾をほどこして。そして、この薔薇をシートに飾りに」

ローサ 「それならその時は、その馬車、私の新しい旅立ちに」

ロレンソ 「そうとも。必ず迎えに来るから」

ローサ 「もちろん相手はアンタじゃないけど」

ローサ、ロレンソから冷たく離れて。

ロレンソ 「君が僕に振り向かないのは、僕が貧しいから」

ローサ 「貧しいなんて。愛さえあれば」

ロレンソ 「痩せっぽっちだから」

ローサ 「ヒターノは皆、痩せてるもんよ。ことに馬車職人ときては」

ロレンソ 「なら、歌声がまずいから（一声あげてみる）」

ローサ 「確かにひどいわ。でもこの際、それは関係ない。私が欲しいのはたくましいほどの色気よ。見つめられただけでいっぺんに抱かれたように漂う色気。魔法にかかるの、その毒で」

ロレンソ 「毒なら死んでしまっじゃないか」

ローサ 「死んだって構わない。毒牙に身をゆだねるわ」

ロレンソ 「苦しんでちゃ何にもならない。ことに恋の飲びつてやつは」

ローサ 「もだえる苦しみさえも飲びつてこと。ああ、エドムンド。初めてなのよ、こんなに苦しい恋の相手は」

ロレンソ 「すっかりまじないに掛かったね。僕にも一服盛っておくれよ。君の煎じた恋の媚薬で」

ローサ 「風邪薬くらいなら煎じてあげる」

ロレンソ 「心が欲しいんだよ、僕ア」

ローサ 「それは捧げてもうないの。出征の朝にエドムンドが持つてった」

ロレンソ 「一年も前の話じゃないか」

ローサ 「それがね、何日経っても、昨日あったみたいに蘇るの。最後に交わした口づけの感触だって、まだ残ってる」

ロレンソ 「うわあ…生々しい」

馬車職人たちの歓声上がる。

ホセ 「ローサ！聞いてくれ。うちの大事な末娘がたった今、婚約を」

ローサ 「(皆の輪に近づき) まあ。誰と」

ロレンソ 「ねえローサ、僕の話はまだ…」

ホセ 「クリステイネ、未来の婿さんを」

クリステイネ 「ファビアンよ」

ファビアン 「(ひざまつき) 役所の人間の話では、スペイン軍はイギリスと手を組んで、ど

この街でも勝ちまくってる。この招集も決着をつけるための兵隊集めだから、

どんなに長くたって一と月か二月。それで帰って来られるって。だからクリス

テイネ、少しの間待っていて。どうか僕の大切な人、永遠の愛を受け入れて欲

しい」

クリステイネ 「ええ。私、お受けします」

ホセ 「よっしゃ。出来た！」

一同の歓声。

ファビアン 「帰ってきたらすぐに式を。その時はローサ、君が祝いの踊りを」

ローサ 「ええ。いいわ」

ホセ 「七十もある馬車作りの工程をようやく一人前に仕込んだら、今度は手塩にかけた娘まで。それも、これで三人目だけ」

ミーア 「何言ってるのさ。嬉しそうな顔して」

ホセ 「そりやまあ、どこかの馬の骨にくれてやるより、手前んとこの若い衆にもらわせた方がこちとらの威厳も保てるってなもんだが。なあ、ローサよ、うちの新しい婿が帰ってきたら、その時は、アンタのエドモンドと一緒に、合同の式を挙げようじゃないか。そうなりや、アンタもうちの娘と変わりが無い」

ミーア 「また！お父ちゃんはでれえとして。いつだって調子のいいことばかり」

ローサ 「いいわ。エドモンドが帰ったら」

再び、遠くで響くラツパの音。

ホセ 「二度目のラツパが鳴った。さあ！みんな集まれ。行くぜいよいよ戦き場によ」

ローサ 「さあ、お別れよ！今日がどんな日だか」

男たち 「出発の日！」

ローサ 「向かう先は」

男たち 「マドリード！」

ローサ 「倒す相手は」

男たち 「ナポレオン！」

ミーア 「もし、ここまで奴らが迫って来ても、街は女たちに任せておくれ。ヒターノと野次るフランス軍に向かって、大声で追っ払ってやるから」

女たち 「そうとも！」

ローサ 「さあ！立ちあがって、嘘っぱちの皇帝を倒して来て頂戴」

男たち 「オー！」

女たち 「私のために」

男たち 「オー！」

女たち 「私のために」

男たち 「オー！」

女たち 「テ バフタロ（幸運でありますように）！」

男たち 「テ バフタロ！」

一同、声を上げながら退場していく。

一人残るロレンソ、リースを柱にかけ。

ドラ、登場。

ドラ 「兄さん」

ロレンソ 「ドラ……」

ドラ 「昨夜占ったカードの通りね」

ロレンソ 「お前のタロットは外れたことがない」

ドラ 「そのうち目も変わって来るわ。私、そう言ったでしょ」

ロレンソ 「しかしなあ。彼女の頭の中はエドモンドで一杯だぜ。何を言ったって、入り込む隙間すら。（明るく）仕方ない。この装飾は教会の扉の飾りにでも。思いの丈は伝えたんだから（手で顔を覆う）」

ドラ 「結構、傷ついたのね」

郵便配達夫、登場。

郵便配達 「この街にローサという人は」

ドラ 「ローサ」

郵便配達 「歌の達者なヒターナさ。恋人にエドムンドって奴がいるんだが」

ロレンソ 「それなら間違いない。この街の女神さ」

郵便配達 「手紙なんだ…軍からの。おそらく同じ部隊の戦友だろうな。約束し合ってたんだろう。もしもの時は、お互い故郷へ伝えると」

ロレンソ 「なら僕が手渡そう。どうせ僕が読み聞かせることになる。この街のほとんどは、もちろん彼女も字が読めない」

郵便配達 「(手紙を渡し) そうかい。何だって構わんがね。助かったよ。ようやく一つ役目を終えた。北はひどい有様さ。郵便馬車のなり手がなくてね」

ロレンソ 「半年も前の日付じゃないか」

郵便配達 「だから言ったろ。郵便馬車のなり手がないのさ。あちこち彷徨ってるうちにこんなに時間がたつたらしい。俺にしたって臨時の頼まれ仕事さ」

ロレンソ 「だって、スペイン軍はマドリードでもセビリアでも勝ち戦ばかりなんじゃ」

郵便配達 「まさか。そいつは相当古い情報だな。半年前の戦鬪で大打撃を食らってから、マドリードは今、フランス軍に押さえられてら。荒れ放題のまるで地獄の無法地帯さ。その手紙もちょうどその頃の」

ロレンソ 「(手紙を読み) これは…」

郵便配達 「嫌なもんだね。そういう顔を日に何度も見る…」

ロレンソ 「…」

郵便配達 「それじゃ頼むぜ。間違いないな」

郵便配達夫、退場。

ロレンソ、黙って立ちつくしている。

ドラ 「悪い知らせね…」

ロレンソ 「(手紙を見せ) 今の男の話がみんな本当だとしたら…どうやら僕たちは、役人に騙されて連れて行かれるらしい…」

ドラ 「これ…」

ロレンソ 「ローサには言うんじゃないぞ…」

ドラ 「エドムンド 行方知れず…生死…不明」

聞こえる皆の歓声。

意気揚々と繰り返し「テ バフタロ！」の掛け声、響く。

照明、CHANGE。

○パレス・オブ・ローズ

ローズ、リースに向かい、登場。

少年たち、後続く。

コロモ 「何だってその人は薔薇のリースを贈ったの」

少年 a 「彼女の象徴を描いてみせたかったので。真っ赤な薔薇はローサそのもの。すべてを物語る」

コロモ 「告白の捧げもの」

少年 a 「その頃、貴族と教会だけに許された様々な飾りを、彼が一手に引き受けていました。その腕を買われて」

ケワイ 「確かに凄い技術だもの」

少年 a 「特にこれは彼の思いの丈が。告白までの長い長い時間をかけて」

ローズ 「彼女のこと、ずっと想っていたの」

少年 a 「ええ。物心ついた時から」

ケワイ 「すごい。片思い歴何年」

コロモ 「ジプシーは一途」

少年 a 「この土地ではヒターノと。女性はヒターナ」

ケワイ 「ヒターノは皆、そんな」

少年 a 「普通の人とは暮らしぶりがまるで。愛と歓び。歌と踊り。そして、心の声が何よりも重要に。嘘はありません」

ローズ 「心の声」

少年 a 「そうです。真実の心に命を賭けます」

ケワイ 「アンタ、ホンとに子供」

少年 a 「僕の右目が言うんです。僕自身は半分も意味が分かりませんよ」

ケワイ 「アラ、お生憎様」

ローズ 「ロレンソはローサに夢中。活気に満ちたその歌声と踊りを、夢見心地でいつもその眼に焼き付けて」

少年 a 「そうなんです」

ローズ 「聞いてるとその姿が目には浮かんで…。何だか歌いたくなる…。分からないのね。

ケワイ 何故、歌いたくなるのか。昨夜がけじめだと心に誓ったのに…」

ケワイ 「終わっちゃいけないからですよ」

コロモ 「そう。昨夜の続きを心がまだ欲しがっているから」

ケワイ 「もう一度、支配人が戻ったらその話を。ああもう、どこ行っちゃってるのかしら、あのオバサン！」

ローズ、冷静さを取り戻し、離れる。

コロモ 「ローズさん…」

ローズ 「それは無理。私、決めたもの。幕を閉じたの。昨夜、パレス・オブ・ローズと共に」

ケワイ 「それじゃ、やっぱり…」

ローズ 「私のやり方、私が徹すから」

間。

少年 a 「あの…。やめるんですか。もしかして」

ローズ 「そうよ」

少年 a 「何故です」

ケワイ 「大人の事情。何、それも右眼が言わせてんの」

少年 a 「だって歌手なんですよ。有名な。僕のお父さんだってあなたのことを知っていません」

ローズ 「ありがとう」

ケワイ 「お父さんだって」

コロモ 「そりやそうでしょ」

ケワイ 「アタシがローズさんに初めて会った時、子供の頃から見てましたと言ったら睨まれた」

ピアノ弾 「当り前だろ」

ローズ 「それにね…実を言うと私、ここ何年も自分が何のために歌っているのか分からなくなってた」

間。

ローズ 「私が懂れたのはヨーロッパあたりのクラブやサロン。歌って踊ってお酒を飲んで。毎日のショーの入れ替わり。最初のヒットですぐにここを拠点に決めて。お店の中に入りきらずに、いつも人で溢れ返って…それが。時代も変わった。人も変わった。口遊む曲も。流行のダンスも。それに私にしたって…高音のキーも下がったわ」

ケワイ 「でも、あなたは新しいジャンルの曲やステップも、アタシの提案するヘアやメイクだって、その都度、自分のものにしてきたじゃありませんか」

コロモ 「私の縫う衣裳にだって。いつもこだわりを持って」

ローズ 「嘆いてるんじゃないのよ、私。本当。時が移ったって、そう言ってるの。時が移った。それが今…その話を聞いていると、途端に時間が体の中を走り出して。あの頃の歌が。あの頃の息づかいが。何故なの…。流れてきたたくさんの時間が、今の私とまるで同時に生きているよう。みんな横並びになって」

少年 a 「ロレンソです」

ローズ 「ロレンソ」

少年 a 「彼があなたを呼び覚まそうと」

ローズ 「どういう意味…」

少年 a 「繋がっているんです。あなたとの時間が。表面的な意識を遥かに超えて」

ローズ 「分からないわ」

少年 a 「兎に角、聞いてください。きっとローサと出逢えるはずですよ。そして、ロレンソに」

ローズ 「出逢うって…。何のために」

少年 a 「分かりません。それを僕も知りたくて」

ローズ 「もういいわ。やめて…。何だか私、混乱してきた」

ピアノ弾 「いや。聞きたいね。俺は」

ローズ 「(見て)…」

間。

ピアノ弾 「少年、話してくれよ。見えることみんな。俺が聞くから」

コロモ 「私も」

ケワイ 「聞くわよ。聞かせて」

少年 a 「いいですか」

ローズ 「(背を向けている)…」

ピアノ弾 「ロレンソは手紙を受け取った。ローサに内緒で。それから、少年」
少年 a 「は、はい」

コロモ 「戦場へ向かった馬車職人たちは」

少年 a 「帰って来ません。約束の一と月が過ぎても」

ケワイ 「誰も」

少年 a 「二月经ち、三月经ち、とうとう季節が変わって半年が過ぎ……。その日暮らしのヒターノの生活はすっかり変わって。仕事はなく、食料も乏しく、ようやく小さな畑を借り受けて、麦や芋を耕すだけで」

ケワイ 「うわあ、悲惨」

少年 a 「繰り返し繰り返し思われるのは恋人との時間。ゆっくりと思い出だけが重なりあって」

コロモ 「どんな風に見えるの」

少年 a 「まるで走馬灯のよう。その度、心は揺れて。重なる影がゆっくりと……」

ローズ 「……」

少年 a 「やめましょう……。あなたに聞いてもらえないなら、僕……」

コロモ 「大丈夫。続けて」

少年 a 「しかし……」

ピアノ弾 「ローズ」

間。

ローズ 「(振り返り) 女たちは」

少年 a 「それでも恋人たちの帰りを待ったんです」

照明、CHANGE。

○街の外れ

イントロ START。

女たちが鋤や鍬を持ち集まって来る。

イリス、チタ、クリステイネ。

疲れた様子で遠くを見つめ。

自分たちの恋人の名前を、一定のリズムで繰り返す。

女たち 「ダビド：ハイメ：ファビアン……」

クリステイネ 「ああ、ファビアン。昨夜も私、あの人を想って一人で泣いた」

イリス 「いつまで待てば、あなたに会える」

クリステイネ 「長引くの」

チタ 「分らない」

イリス 「想い出ばかりがよぎる。恋しいあの人」

チタ 「懐かしいあの人」

クリステイネ 「まるで昨日のよう。あの頃の景色がいつも、私の目の前に」

イリス 「そう、出逢ったころの。懐かしいあの人」

チタ 「そう、ゆっくりと。ゆっくりと」

クリステイネ 「まるで昨日のよう。初めて出逢った景色が、今」

(あなたに巡り会えたわ)

♪黄昏に ひとり歩くわ

海辺 風の香り

気がつくと あなた

波打ちぎわを行く

瞬間 ころ奪われ

恋の神秘 背中にはしる

あなたに 巡り会えたわ

甘い愛の はじまりなの

あなたに 巡り会えたわ

瞳の天使 夢とりこ

間奏。

クリステイネ「ああ、ファビアン。遠く離れても私、あなたの女」

イリス 「ダビド。ダビド。毎晩夢見る。私の大事な愛しい人」

チタ 「胸焦がれてあなたに夢中。ハイメ、私のすべて」

イリス 「背中からキスされたあなたの記憶。今も私を熱くさせる」

チタ 「熱い想い届いて欲しい。どこにいるかは分からなくても」

クリステイネ「ああ、ファビアン。どれだけ愛してるか分かる：虜なの私」

イリス 「想い出ばかりがよぎる。恋しいあの人」

チタ 「懐かしいあの人」

クリステイネ「まるで昨日のよう。あの頃の景色がいつも、私の目の前に」

イリス 「そう、出逢ったころの。懐かしいあの人」

チタ 「そう、ゆっくりと。ゆっくりと」

クリステイネ「まるで昨日のよう。初めて出逢った景色が、今」

♪あなたに 巡り会えたわ

はやる気持ち もだえるほど

あなたへ 熱い視線

投げかけたい すぐにでも

あなたに 巡り会えたわ

映る景色 よろこびなの

あなたに 巡り会えたわ

瞳の天使 夢とりこ

瞳の天使：夢とりこ

女たち、嫌気がさしたように鋤や鍬を投げやる。

イリス 「今日もまた一日が終わった」
チタ 「私のあの人、帰って来ない」
クリステイネ 「何故こんなに長引いているのよ」
イリス 「戦況は悪くなる一方だっていうじゃない」
チタ 「そうなるから随分になるって」
クリステイネ 「騙されたのね、私たち」
イリス 「騙されたのよ」
チタ 「役人に」
イリス 「軍隊に」
クリステイネ 「この思い、誰にぶつければ」
チタ 「何よ。アンタ、男は勇ましいのが好きだなんて言ってたくせに」
クリステイネ 「私、そんなこと言わない」
チタ 「言ったじゃない」
クリステイネ 「嘘よ」
チタ 「何が嘘よ」
クリステイネ 「嘘よ。嘘を言ってます。チタ姉さんは、いつもイジワルばかり」
チタ 「(舌出し) ベー」
クリステイネ 「(やり返し) ベー」
チタ 「(やり返し) ベー」
クリステイネ 「(やり返し) ベー」
ミリア、登場。
ミリア 「遠くまで声が聞こえてるよ。いい歳してみつともない」
クリステイネ 「だってひどいのよ、お母ちゃん」
チタ 「ひどいのはどっち。嘘つきね、アンタ」
クリステイネ 「どっちが」
チタ 「そっちが」
クリステイネ 「(舌出し) ベー」
チタ 「(やり返し) ベー」
クリステイネ 「(やり返し) ベー」
チタ 「(やり返し) ベー」
ミリア 「やめなつての。くだらない。何だって、畑から出て来てるの。鋤や鍬を放り投げ」
クリステイネ 「だって」
ミリア 「だっても何もないだろ」
クリステイネ 「(痩せた芋をかざし) これを見てよ。こんなんじや話にも何も」
イリス 「慣れない畑仕事で、種イモにしたって、いいも悪いも見分けがつかない」
チタ 「こいつはカスをつかまされたね」
イリス 「この数カ月、見よう見まねで始めた畑仕事が無駄に終わった」
ミリア 「贅沢言いなさんな。これでもなきや飢え死にするしかないんだよ(芋かじる)」
クリステイネ 「だって、お母ちゃん」

ミーア 「うちは馬車職人。貴族から注文が来たって、男手がない今はどうすることも。ましてやこのご時世、祝い事や結婚式なんてありやしない。そうなりや、女連中の稼ぎになる歌や踊りの祝儀だって。今年は人手がないもんだから、農家の仕事だけはある。これで何とか食いつなげなきや、あとは海へ行って魚や貝でも獲って来るしかないんだよ」

チタ 「そんなこと言ったって、お母ちゃん」

クリステイネ 「そうよ、お母ちゃん」

ミーア 「メソメソしたって始まらない。男たちが帰って来るまで、この街は自分たちで守るんだから」

イリス 「ああ、ダビド。こんな生活から救い出して」

チタ 「ハイメ。早く会いたい。一日でも早く」

クリステイネ 「フアビアン。フアビアン。私のフアビアン」

ローサとドラ、袋を引きずり、登場。

ローサ 「手伝って」

ミーア 「あ、ああ」

ドラ 「こっちも」

ミーア 「重いね」

イリス 「何なの」

ドラ 「芋だのオニオンの」

ローサ 「こっちは小麦」

ドラ 「街のお客が置いてった。占いの代金の代わりだって」

チタ 「こんなに！」

ドラ 「だって夜が明けてから途切れやしない。この戦争でみんな男が駆りだされ、残った家族は気が気じゃないからタロットを頼って」

ローサ 「それに葉もね。まじないが効くって評判で、こっちも引っ切り無し」

ドラ 「昔っから、街の女がヒターノの所に訪ねて来るのは、祝い事か心配事。今の世に祝う種なんてありやしないけど、心配の種は増える一方」

ローサ 「(袋を差し出し) どこかに貯蔵庫作らなきや。これからは食事も繕い物も、みんなで一ところに集まるよ。全員に伝えて」

ドラ 「畑は」

ミーア 「収穫はまだ先。時間はたっぷりあるんだけど」

ローサ 「だったら明日から葉作りを。手の空いてる女連中はみんな手伝って」

ミーア 「いいのかい」

ローサ 「数を増やせば遠くまで売りにだって行けるから」

クリステイネ 「やるわ。私」

ローサ 「(別の袋を指し) だったらそれ、後で運んで。私ん所に」

クリステイネ 「何あに」

ローサ 「昨日、作つといたイモリの干物」

クリステイネ 「嫌ーッ。やっぱり無理」

チタ 「平気よ。私これ好き。精のつく奴。大丈夫、持って行くから」

ローサ 「頼んだよ。私、少し休みたい……」
ミーア 「ありがとうよ、ローサ」

ローサ、疲れたように退場。

チタ 「どうしたの」

ドラ 「今朝方、嫌な夢を。私の所に訪ねてきて、験が悪いつてローサ、気にして」

ミーア 「エドムンドはみんなより一年も長く音信不通だから」

イリス 「気持ち中だつて、ああもやつれて」

チタ 「しかし、あれじゃ。参っちゃまうよ」

クリステイネ 「だからつて、待つしかないじゃない。待つしか」

女たち、肩を落とし黙る。

ミーア 「さ、袋を運びな。こつちまで参っちゃまう」

ロレンソ、肩から鞆を下げ、登場。

ドラ 「兄さん！」

チタ 「ホントだ。ロレンソじゃないの。どうしたのアンタ」

ロレンソ 「うん」

ミーア 「何だつてここに。まさか逃げ出して」

ロレンソ 「ひどいな。そうじゃない。僕はね、郵便を」

クリステイネ 「郵便」

ロレンソ 「そう。郵便馬車にね、志願したのさ」

ミーア 「アンタが」

ロレンソ 「そうだよ」

チタ 「志願を」

ロレンソ 「ああ」

イリス 「すごいじゃない。偉いわ」

チタ 「アンタなら字も読めるし」

ロレンソ 「そうなんだ」

ミーア 「ヒターノの郵便配達夫。名誉なことだよ」

ロレンソ 「名誉だかどうだか」

ミーア 「急に男つぷりが上がった」

クリステイネ 「ねえ、ロレンソ。それならアンタ、あちこち訪ねて回るの」

ロレンソ 「ああ。今はマンサナレスどまりだが、そのうち戦況が変わればトレドやマドリ

ードを超えて、ブルゴスやパンプローナ辺りまで。だつて行く行くはピレネー

を超えてフランス軍を追っ払うんだから」

イリス 「ピレネー山脈を」

ロレンソ 「そうさ」

チタ 「凄ーい」

クリステイネ 「ねえ、ロレンソ。それだけあちこち回つて来るなら、私の恋人に会わなか

つた。私のファビアンに」

ロレンソ 「会ったよ」

クリステイネ 「会った！本当なの」

ロレンソ 「本当だよ。元気だった。ファビアンだけじゃない。他のみんなもね」

女たち、歓声。

ミーア 「詳しく！ねえ、ロレンソ、詳しく話を」

ロレンソ 「ダビドやファビアンはまだ駐屯地のそばにいる。場所は言えないが、ホセの親父さんもハイメも一緒に」

イリス 「ケガなんかしていない」

ロレンソ 「ああ。みんなまだ大きな戦闘には巻き込まれていないから、ここにいた頃とそう大して変わらないかもしれない」

イリス 「良かったア」

チタ 「安心した」

ロレンソ 「ゲリラ隊でね。普段は近くの村で村人として潜んでる。みんな、これから少しずつ北へ。しよっちゅう居場所を変えながらね」

ミーア 「北はひどいの」

ロレンソ 「かなり。僕もまだ全部を見たわけじゃないが、コルドバを超えると毎日どこかしらで鉄砲や大砲の音がしている」

ミーア 「アンタそんな所まで行くの」

ロレンソ 「ああ。最前線まで志願する。郵便を受け取らなきゃならないからね」

クリステイネ 「大砲や鉄砲だなんて。急に恐ろしくなった。そんな中に行つて、もしものことが」

ロレンソ 「ヒターノのゲリラは優秀で勇ましいと評判だよ。仲間同士が助け合つて上手くやつてる。期待もされてるし」

ミーア 「期待より命が大事。うちの人なんかおだてられたら、男っ気出そうと。すぐカッコつけたがるから」

チタ 「お父ちゃんが一番けしかけんのよ。ケンカだつて何だつて」

ロレンソ 「大丈夫。みんな無鉄砲なんかしやしない。家族のことを忘れちゃいないよ」

ミーア 「本当。それならいいんだけど」

ロレンソ 「ああ。みんなのことを想つてる。いつだつて」

クリステイネ 「ねえ、ロレンソ。もつと話を聞かせてよ」

チタ 「そうよ。もつと、もつと」

ロレンソ 「ああ、いいとも。でも、その前に手紙を」

イリス 「手紙？」

女たち笑う。

クリステイネ 「手紙つて：私たち、字が」

ミーア 「アンタだつて知ってるでしょうに」

チタ 「私たちだけじゃない。当の差出人だつて字を知らないじゃないのよ」

ロレンソ 「いやいや。その点はね、心配いらないんだ」

ミーア 「どういふこと」

ロレンソ 「いや、つまりね、どこの地域もそういう人は多い。だから、軍からは代筆も郵便配達夫の役割ということで命令が下つてる」

イリス 「代筆」

ロレンソ 「つまり、本人が言った言葉を、僕らが書き記して配達するのさ。届けた手紙は配達夫が読んで聞かせる。そこまでが任務さ」

ミーア 「本当に」

ロレンソ 「ああ」

クリステイネ 「じゃあ、私たちの所にもアンタが手紙を」

ロレンソ 「もちろん。だから、こうしてはるばる」

私たちの歓声。

ロレンソ 「一人に割り当てられた便箋はこんなに小さいから、短い文になっちゃうけど、それでも恋人たちの生の声を聞いての手紙だ」

私たちの歓声。

ロレンソ 「この村は僕の担当だから、これから何度でも届けるよ。もちろん、みんなの返事も持つて帰る」

クリステイネ 「それなら、いつもあの人の声が聞けるわけ」

ロレンソ 「まあ、兵隊は一ヶ所に長くは留まらないから、なるたけあちこちの街を訪ねて回るよ。その都度、様子も伝えよう」

私たち、歓声。

ミーア 「ロレンソ。その手紙、みんなにあるのかい」

ロレンソ 「そうだね。たいていあるよ。大方の人には会えたから」

ミーア 「だったら、みんなに声かけて来なきゃ。びっくりするよ。昨日まで夜もおちおち眠られずにいたんだから」

ロレンソ 「じゃあ、教会のそばの広場を集って。僕もすぐに行く」

私たち、歓声を上げながら退場していく。

ドラ 「兄さん」

ロレンソ 「ドラ」

ドラ 「どういうこと。何だって兄さんがそんな恰好してるの」

ロレンソ 「うん、まあ、色々あって。これでも僕も男だからね。ま、一身上の都合ということでありまして」

ドラ 「どうりで出て来るカードの絵がガラリと変わっていると思ってた…」

ロレンソ 「なるほど。相変わらず当たるじゃないか。いい目を出てるかい」

ドラ 「出てないから心配してるんじゃないの。いいこと…兄さん、すぐやめて」

ロレンソ 「やめるってお前。これはれっきとした軍の仕事なんだぜ。教会の集団から抜け出すのとはわけが」

ドラ 「うちは兄さんと私、二人つきり。いつだって助け合ってやってきた。ねえ、どうして繰り返し最前線に出向いていく仕事なんかを…。私はね、何故、急に兄さんが心変わりしたのか知りたいの。何故」

ローサ、駆け込んでくる。

ローサ 「ロレンソ！」

ロレンソ 「ローサ」

ローサ 「聞いたの。たった今。飛んできたのよ。アンタ、郵便馬車に」

ロレンソ 「そうなんだ」

ローサ 「あちこち回って、男たちみんなに会って来たって」

ロレンソ 「そうだよ」

ローサ 「ロレンソ、お願い正直に答えて。エドモンドと…会った」

ロレンソ 「それはね…ローサ」

ローサ 「あの人に会ったの」

間。

ロレンソ 「そうなんだ。偶然なんだがね」

ローサ 「ああ！何てことなの。元気なの。今、どこにいるの。けがや病気は。ねえ、どんな風なの！（手で顔を覆い、膝をつく）ああ、私、安心した」

ロレンソ 「もちろん。とても元気だとも。詳しい場所は言えないが、部隊を率いて進軍してる。最前線で指揮しているから休暇も取れない。皆が彼を慕っているしね」

ローサ 「あの人が指揮を」

ロレンソ 「そうなんだ。ゲリラ部隊の指揮官に。ヒターノの中でも出世頭だよ」

ローサ 「やっぱりそういうこと。私の目に狂いはなかった。あの人がそんなに偉くなってるだなんて。でも、それじゃとても危険なんじゃ」

ロレンソ 「確かに。とても慎重に動かなくちゃいけない。だから、彼についての情報は極秘中の極秘なんだ」

ローサ 「そうか。それで誰もエドモンドのことを。アンタはよく会えたのね」

ロレンソ 「それが役目だから。どんな偉い上官だって手紙は届けたいだろ。だから、最前線まで行けば、どんな人たちとだって僕は顔を合わせることに」

ローサ 「凄いやないのロレンソ。アンタ、ホントに偉いと思う。特別な役目よ」

ロレンソ 「(大きな便箋を出し)これが手紙だよ。エドモンドには特別な便箋を用意した。皆より余計に戦場にいるわけだから。思いの丈が人より沢山あるだろ」

ローサ 「素敵な考えね。嬉しいわ。本当に」

ロレンソ 「よかった。皆には秘密だよ」

ローサ 「分かってる。約束するから早く読んでみせて」

ロレンソ 「ああ…愛しいローサ。長い間、心配かけてすまない。激しい任務の毎日、今の今まで便りを出すことが出来なかったんだ。フランスとの戦いは未だ続いている。とても厳しく、過酷な戦いだ。でも、俺は生きている。毎日、君のことを想って。朝な夕な、君のことを考える。君は今、何をしているだろうか。起きたところだろうか。眠りにつくところだろうか。君がああ美しい踊りと歌を俺の前で見せてくれたあの時のまま、君は今日も輝いているだろうか。毎日、君を想っている。どうか待っていて。きっと、もうすぐ逢えるから。愛してる
ローサ。いつだって俺は君の心に」

ローサ、黙って体を震わせている。

ローサ 「ああ、エドモンド…やっと…やっと…一年半も経って、やっとあの人の言葉が。生きてるのね。エドモンドは生きて想っていてくれるのね、私の事を」

ロレンソ 「そうさ。話すことと言えば君のことばかりだ。それはもう嬉しそうにね」

ローサ 「今日は何ていう日なの。今日は朝から嫌な夢で、不吉に思って塞いでいたの。けれど、これですっきり。ねえロレンソ、伝えてくれる。これからもあの人の

言葉を」

ロレンソ 「もちろん。君の言葉も持って帰るよ。そして、彼に伝えよう。一言一句漏らさずにね」

ローサ 「ロレンソ！今日からアンタは私の大事な友達よ。お願い。全てをアンタに託すから。だから伝えて。私の愛しい人に」

ロレンソ 「伝えるとも。彼を想う君の言葉を」

ローサ 「エドムンドは生きてる。エドムンドは生きてる。私、どんなことがあっても待つわ。あの人のためなら何だって出来そうなのがするの。ああ、こんな気持ち初めてよ。エドムンド、エドムンド、エドムンド。生きていてくれた」

(咲き誇る花たち)

♪咲き誇るわ 愛しい花たち

このよるこび 私をつつんで

うつくしく 夢ひらく

命のかぎり 愛するあなた

なぜかしら ところが止まらないの

微笑みの花ひらけば

声あげずに いられない

今 咲き誇る

抱きしめて 抱きしめて

わたしのすべてを

抱きしめて 抱きしめて

世界のすべてを

咲き誇るわ 愛しい花たち

このしあわせ 私をつつんで

あこがれの 夢をみて

未来のちぎり かわすの二人

なぜかしら ところが止まらないの

悲しみの日々もすぎて

歌わずには いられない

今 咲き乱れ

抱きしめて 抱きしめて

わたしのすべてを

抱きしめて 抱きしめて

世界のすべてを」

ロレンソ 「最後にキスを…。(手紙を渡す) そう伝えて欲しいと」

ローサ 「ああ、あの人が生きています。今でも変わらず私を想って。ロレンソ、お願い。これからもきつと」

ロレンソ 「届けよう。約束するよ。必ずね」

ローサ 「嬉しい。何だかじつとしていられない。行くわ。すぐに来るでしょ。みんな待ってる」

ロレンソ 「ああ。すぐに。みんなにそう言って」

ローサ 「行きかけて。伝えて欲しいの、私からって。百万回のキスを」

ロレンソ 「代わりに僕がするのかい」

ローサ 「馬鹿ね。言葉だけ伝えてくれれば」

ロレンソ 「ああ、そうか(笑)」

ローサ 「待ってる」

ロレンソ 「すぐ行く」

ローサ、退場。

ロレンソ、ドラに気づいて首を垂れる。

ドラ 「兄さん」

ロレンソ 「(頷いている)…」

ドラ 「志願した理由…これね」

ロレンソ 「…実はね、ドラ」

ドラ 「馬鹿なことを。ローサが知ったらどうするつもり。エドムンドが戦場で亡くなつた事実を。自分の恋人が一年も前に亡くなつていたという真実を」

ロレンソ 「そのことなんだが、ドラ」

ドラ 「どれくらいローサが傷つくと。ローサだけじゃない、そうなれば兄さんだって」

ロレンソ 「ドラ。僕がもし、エドムンドが本当に戦死したと思っっているんだったら、こんなことはしやしないんだよ」

ドラ 「何ですって!?!エドムンドが!生きてる」

ロレンソ 「そうだよ」

ドラ 「(首を振りながら) No…No…No…兄さん…。いつか届いたあの手紙、まさか忘れちゃいないでしょ。あれは、あの手紙は、同じ戦場の戦友からきたのよ」

ロレンソ 「ただ、あれに死んだとは。行方が知れなくなつたとあつただけだ」

ドラ 「兄さん…!」

ロレンソ 「この戦争はね、僕らが伝え聞いていた姿なんかより、ずっと深刻で悲惨だよ。戦場を歩いてみてよく分かる。行方が分からなくなつた兵隊なんてそこいら中ごまんといえるんだ。中には勝手に戦線を離脱して流浪している奴だって。ましてや、ゲリラなら尚更さ。僕はねドラ、きつといつかエドムンドに出くわすんじゃないかと思う。そういう気がね、してるんだよ本気で」

ドラ 「エドムンドが戦場から逃げ出してると思う。あの人が。あの男っ気たつぷりのヒターノ男がよ」

ロレンソ 「しかしね」

ドラ 「よく聞いて。むぎいようだけどそれはない。私はね、随分前からそのことを…。確信を持っていたの。あの手紙が届くずっと前から」

ロレンソ 「カードで…」

ドラ 「そうよ。何度切ってもいつも同じ。私の経験上、ここまできたら天地がひっくりかえっても間違いない。だから、言えずにいたのよ。黙って来たの。友達として、どう伝えたらいいか分からないから。兄さんも同じでしょ。正直に言って。だったら私も手助けしようがあるというもの」

ロレンソ 「手助け…」

ドラ 「ローサに真実を告げることへのよ」

ロレンソ 「聞いてくれ、ドラ。僕は本気で」

ドラ 「兄さん」

ロレンソ 「マドリードの戦いに加わった奴とも何人会えた。エドムンドがゲリラの戦闘に立っているのを見た人間にも。その数日は街は大混乱で、敵も味方も行方知れずが沢山出たそうさ。でも、誰一人、彼の亡骸を見ていない」

ドラ 「それは、それを確かめる術がなかったからでしょ。瓦礫や死体にうずまっって、誰が誰だか分かる状況じゃ」

ロレンソ 「だったらケガをして運ばれたかもしれない。どこかの街に紛れているかも。別のゲリラと組んで。そういう例もないわけじゃない」

ドラ 「兄さん。死んでるわ、間違いない」

ロレンソ 「いや、僕は探すよ。絶対」

ドラ 「…探す!？」

ロレンソ 「そうとも。僕は国中を歩いてエドムンドを探す。探し出してみせる。そのため、わざわざ志願して」

ドラ 「正気なの、兄さん!これは賭けじゃないのよ。遊びじゃないの。兄さんの命がかかっている。そんな…振り向いてさえもらえない恋の相手のために」

ロレンソ 「ローサは信じているんだよ!エドムンドがまだ生きてるって。別れを見送った恋人を今も想って…。そんなローサに…僕は見聞きしただけの話を伝えるなんてこと」

ドラ 「…本当に好きなのね。ローサのことが」

ロレンソ 「ああ。好きだよ。心から。僕はずっと昔からローサに憧れてきた。何年も前から…子供の頃からだ。ずっと。いつも遠くで眺めて。ろくに口もきけずに、ため息ばかりの日々だったけど、それでもローサが歌い、そして踊る、あの笑顔が僕の糧になって今日まで生きて来たんだよ。ローサのそういう姿を見ているだけで僕まで気持ちが明るくなって。僕はローサのあの姿がなくなっちゃ生きていけないのさ。ローサからあの歌声を奪っちゃいけない。その気持ちがどうしようもないくらい僕の身体にぐらぐらと沸き上がって。だからこそ迷わず志願を。振り向いてくれなくてもいい。あのローサの姿が見られれば。そのためだったら僕は、僕の出来るすべてを投げ打ってでも」

ドラ 「もし…もしもよ。到底そんなことは起こりっこないけど…それでも、もしエドムンドが見つかったとしたら、その時は兄さんの恋も終わるのよ」

ロレンソ 「ああ」

ドラ 「見つからなかったとしても、兄さんの恋は実らない。どちらにしたって…」

ロレンソ 「ああ」

ドラ 「分かっているそれを…」

ロレンソ 「それだっていいんだ」

ドラ 「小さい頃から私たち、いつだって協力し合ってやってきた。それでも…。私、理解できない。とてもじゃないけど上手くいきっこない。協力だってしない」

ロレンソ 「いいさ。一人で。ただ、黙っていてくれさえすれば」

ドラ 「それがローサのためになると本気で」

ロレンソ 「馬鹿でも愚かでも何でも言ってくれ。理屈なんてどうだっていい。ローサを悲しませないためなら僕は」

ドラ 「私のカードに兄さんの…危険を知らせる札が出たらその時は、絶対に降りてもらうから。覚えておいて。これだけは絶対」

ロレンソ 「それだって約束は出来ない」

ドラ 「兄さん！」

ロレンソ 「…」

ドラ 「私…とてもついていけない」

ロレンソ 「いいさ。一人で」

ドラ 「ついていけないわ…」

ドラ、皆のいる逆側に退場していく。

ぽつねんと残る、ロレンソ。

ロレンソ 「いいさ…。一人で…」

(君だけ想う)

♪ほほつたう 君の涙

夢はてなき とおく 祈る恋

ひとり待つ 時の軌跡

たとえそれが 誰で あっても

ああ ぼくはもう この身焦がしても

すべての愛ささげたい 何もかも棄てていい

そう 実らぬ恋だつてある

胸に秘めいく 想いは

だれも 分からない

ひとりきり 風に 吹かれてる

この激しい 胸の せつなさ

悟られずとも

思い出 つめこむ 日のように

愛してる それでいい 君だけ想う

夢でさえ 君の涙

見れば痛む ころろ 凍らせる
旅の空 君を想う
たとえそれが 辛く あっても
ああ 報われぬ 恋のほのおさえ
すべての愛ささげたい 人生を賭けていい

そう実らぬ恋だつてある
闇にもだえる ころろは
だれも 分らない
ひとりきり 雨に うたれても

この激しい 胸の たかなり
見せられずとも
幸せ あつめて いくように
愛してる それでいい 君だけ想う」

ロレンソ、鞆を下げ直し、女たちの元に向かう。
暗転。

※(2)※

○パレス・オブ・ローズ

ローズ、登場。

少年たち、それに続く。

ローズ 「初めて人前で歌った時のこと憶えてる。母に手を引かれて初めて近くの将校クラブへ。大きなリボンをつけられて、ピアノの前に立たされた。身体の中で何かが弾けて、まるで宙に浮いてるような気分。聞いていた周りの大人たちは一斉に私を見て、驚いた顔で…そして、次々にその手を叩くの。惜しげもなく。そんな小さい頃から私、拍手の味を覚えてしまった」

少年 a 「それが、あなたの歌との出逢い」
ローズ 「その頃は意味も分からず口立てでジャズを。でなきや仕事が貰えないから。兄弟は多かったけど、歌えたのは私一人。だから、おのずと自立心が身についた。それに孤独も。だから余計に身震いしたの、大勢のアンコールに。子供ながらにもう虜よ」

ローズ、ステージ前に近づく。

ローズ 「ステージ：ステージ。私にはそれが全世界。学校へ上がる頃に母は亡くなったけど、歌だけは私に残してくれた。いつも喜んでくれて、自慢してた。私はその時、本当の意味で覚悟を決めたの。この一生に飛び込んでいく覚悟」

ローズ、照明のスイッチを入れる。

ローズ 「私は悲しい時も、母に聞かせるようにステージが上がった。いくつかの通り過ぎ
ピアノ恋も、みんなステージがきっかけ。激しく恋して、やがて明かりが落ち
る。いつもその繰り返し。だから、私の思い出はみんなステージと一緒に」

ローズ、照明のスイッチを落とす。

ローズ 「エドムンドが生きていると答えた時、ロレンソは覚悟を決めたわけね。自分が
生涯を懸ける覚悟を」

少年 a 「そうです。あの瞬間、人生が変わりました」

間。

ローズ 「不思議なのね…。あなたの話を聞いてると…いつの間にか自分の時間も遡って。
まるでお互いが少しずつ近づいているみたい」

少年 a 「近づいています。時間とそれに記憶が」

ローズ 「記憶」

少年 a 「記憶そのものに時間の概念はありません。あるのは近づく二つの意識だけ。あ
なたとローサ。同時に進行しています」

コロモ 「二人の記憶が近づいて行ってるってこと」

少年 a 「そうです」

ローズ 「私にローサの記憶があると」

少年 a 「でなければ、あなたにアクセスしてきません。このままいけば、いずれ重なり
ます」

ローズ 「記憶が」

少年 a 「記憶と時間が。今、ここにいるあなたと」

間。

ローズ 「あなた、すっかり私を引きずりこんだわね。あなたのその右眼の世界に」

少年 a 「まだですよ。あなたは、まだローサに出逢えていません。そして、ロレンソに
も。あなたはそこで必ず何かを見つけるはず」

ローズ 「見つけるって」

少年 a 「分かりません。僕はただ伝言を伝えるだけ。僕の謎でもあるんです」

ピアノ弾 「ローズ」

ローズ 「聞くしかないようね…。ロレンソが語りかけてくるその謎を」

ローズ、皆の側に戻って来る。

ローズ 「エドムンドは」

少年 a 「見つかりません」

ローズ 「国中を探して回るの」

少年 a 「何度も前線を行き来して、国境や険しい山岳地帯まで」

後方の通路にロレンソ、登場。

コロモ 「郵便馬車って、そんなに危ない仕事」

少年 a 「絶えず戦場から戦場を駆け抜けます。手紙は極秘の情報だって預る唯一の通信
手段ですから、敵に見つかれば確実に殺されます」

ケワイ 「ええ…そんななの」

少年 a 「それに、郵便馬車といっても、馬が使えるのはほんの限られた所だけ。ほとん

どは長い距離を歩いて。途中、盗人や山賊のいる村をいくつも通り過ぎ、食料の配給もあつたりなかったり」

ケワイ 「いとこなしの仕事じゃないの」

少年 a 「手紙を受け取れば、またすぐに街へと戻ります。彼女たちに読み聞かせるため」

ロレンソ、退場。

コロモ 「街の様子は」

少年 a 「戦争は長引いています。二年が過ぎても情勢は悪くなる一方。だから、生活は

日に日に苦しくなつて。ドラの占いとヒターナの薬売りは貴族や商人からの客がつき、どうにか食糧難の時代を乗り切っています」

「ヒターナの薬売りつて、まじないが掛かっているやつ」

少年 a 「それがヒターナスタイルですから」

コロモ 「魔術なの」

少年 a 「周囲の人たちからはそう思われています」

ケワイ 「妖しげなのがまた魅力なのよ」

少年 a 「ローズに仕事を教わつて、薬草集めから製造、販売まで女たちが手分けを。昔ながらの生活に戻り、一つ空の下で皆が暮らしを共にして」

コロモ 「かえつて賑やかになつてない」

少年 a 「すっかり変わりました。心の支えが出来ましたから。長引く戦いの中で彼女たちが耐えられたのは、間違いなくロレンソの存在があつたから」

ローズ 「ロレンソの手紙」

少年 a 「彼女たちが待ち焦がれる何よりの拠りどころ。遠く離れた恋人たちの心を、その短い文章が救いました」

ローズ 「歓迎されるんでしょうね」

少年 a 「そりやもう、熱烈に。ロレンソの帰郷は、彼女たちにとって救いの天使。繰り返し眺めるその手紙を、まるで相手の分身のように抱いて」

ケワイ 「まあ。しおらしい」

少年 a 「まさか。彼女たちの血はそんなお淑やかなものじゃ」

コロモ 「全身で喜びを」

少年 a 「そうです。激しく魂を揺さぶります」

ローズ 「心のままに歌い踊つて。情熱的に」

少年 a 「それがヒターナスタイル」

照明、CHANGE。

○薬売場

イントロ、殴りこむ。

ヒターナの女たち、登場。

薬研、乳鉢、乳棒、天秤といった道具を手に、薬作り。

皆で口々に口上しながら薬売り。

女たち 「くーすりイー。くすりー。よく効くくすり。まじないの効いたあくすりだよ」

イリス、チタ、クリステイネが店先で踊る。

イリス 「今日も待つ。あの人からの便りを。手紙をもらってから、気持ちが変わった」
チタ 「何度も読み返す。字なんて分からなくても」
クリステイネ 「それだっていいわ。あの人のもっと感じられるから。いつも肌身離さず」
イリス 「ああ、出逢ってしまったのね。あなたと」
チタ 「ああ、悔しいけれど夢中なの」
クリステイネ 「ああ、いつだってあなたに魅せられて」

(祭りの夜)

♪

(イリス) からだにうづく リズム刻まれて

(チタ) ひるがえし揺れるスカート魅せつけ

(イリス) 踊り出す深い夜 あなたへの愛

La Ilama de la passion (情熱の炎)

(クリステイネ) 熱い息吐いて 流れる黒髪

目に映る炎に 赤い大地

(イリス) もう あなたに夢中

(チタ) 情熱の歌声

(クリステイネ) あやつられ 溶けいく

(三人) 魅入られいく ままよ

(女たち) きらめく恋に あなた 惹きよせるの

(クリステイネ) 魂 焦がすわ 激しく

(三人) Baila Baila (踊る)

(女たち) 魅惑の愛に わたし 燃えつきるの

(クリステイネ) 妖しい腰つき 抱きしめられ

(三人) Noche de una Fiesta (祭りの夜)

間奏。

ミーア、薬草を摘んだ袋を下げて駆け込んでくる。

ミーア 「ロレンソだよ！ロレンソが」

ロレンソ、登場。

ロレンソ 「やあ、みんな」

一同 「(口々に) ロレンソー！」

ロレンソ 「元気かい。恋人たちの便りを届けに来たよ」

女たちの歓声が上がリ、ロレンソに群がる。

チタ 「すまないけど、今日は店じまい。ご婦人方、また明日にでも来てご覧な」

ロレンソ 「イリス、ダビドから。夢に見る君の微笑み。恋する君の長い黒髪。すべての言

葉で君を愛する。君が欲しい」

イリス 「ああ。あなたの元に行きたい」

ロレンソ 「チタ、ハイメだ。君の誕生日をここから祈ってるよ。僕を見て。心の窓から。僕と共にあれ」

チタ 「あの人憶えててくれた。明日なのよ、生まれた日」

ロレンソ 「クリステイネ、ファビアンから。僕の心は君で一杯。僕の幸福。僕の女神よ。海一杯の愛を君に。クリステイネ」

クリステイネ 「愛してるわ！私もよ！私の愛しい人」

ロレンソ 「さあ、みんなのを持ち帰った。誰も欠けることなく」

女たち、再び歓声を上げる。

ロレンソ、次々と手紙を読んでいく様子。

♪

(イリス) 流れる星に運命うらなって

結ばれたふたり 遠い過去から

(チタ) 二人の長い夜 永遠の愛

La llama de la passion (情熱の炎)

(クリステイネ) もれる吐息から 揺らめくこころに

うるむ影まばらに 熱い涙

(イリス) もう あなたの奴隷

(チタ) 魂の歌声

(クリステイネ) あやつられ 熔けいく

(三人) どうなってもいいの

(女たち) きらめく恋へ あなた 惹きよせるの

(クリステイネ) 魂 焦がすわ 激しく

(三人) Baila Baila (踊る)

(女たち) 魅惑の愛に わたし 燃えつきるの

(クリステイネ) 揺れる 胸もと 抱きしめられ

(三人) Noche de una fiesta (祭りの夜)

ロレンソ、女たちに手紙を読み続けている。

手紙を受け取った女たち、踊りに加わっていく。

ロレンソ 「愛する君へ。僕のありったけのキスを贈るよ。(手紙渡す) 深い深い海の底より まだ深い愛で君を愛す。(手紙渡す) お前の口づけが忘れられない。もう一度抱

きたい、その熱い胸で。はい、これはミーアだ(手紙渡す)」

ミーア 「少女のようにはにかみ) 嫌だよー。年がいもなく！あの人は」

♪

(イリス) もう あなたに夢中

(チタ) 魂の歌声

(クリステイネ) あやつられ 熔けいく

(三人) 魅入られいくままよ

(女たち) きらめく恋に あなた 惹きよせるの

(クリステイネ) 魂 焦がすわ 激しく

(三人) Baila Baila (踊る)

(女たち) 魅惑の愛に わたし 燃えつきるの

(クリステイネ) 妖しい腰つき 抱きしめられ

(三人) Noche de una Fiesta (祭りの夜)]

女たち、歓声を上げて喜びあっている。

ミーア 「さあ、これで全部行きわたったかい」

クリステイネ 「あとはローサよ」

ミーア 「じきにくるよ。大方、葉草は摘んじまつてる」

少し離れた高台にドラ、登場。

ロレンソに冷たい視線を送っている。

クリステイネ 「ドラ」

チタ 「兄さんが戻ったよ」

ミーア 「おいで。三か月ぶりじゃないか」

ドラ、そのまま無言で退場。

ミーア 「ドラ！」

クリステイネ 「どうしたんだろ。近頃、ちつとも話をしない」

チタ 「何かあったの」

ロレンソ 「いいんだ」

ローサ、息を弾ませて登場。

ローサ 「ロレンソ！」

ロレンソ 「やあ」

ローサ 「私のエドムンドは。もちろん会えたのよね。元気だった」

ロレンソ 「ああ。うん。もちろんさ。活躍してる」

ローサ 「ちゃんと食べてる。ケガもない」

ロレンソ 「ああ。相変わらず元気さ。ピンピンしてる」

ミーア 「またみんなで返事を考えようじゃないか。ロレンソ、いつもの教会の広場で」

イリス 「先に行って待ってるから」

ロレンソ 「じきに行くよ」

女たち、退場。

ローサ 「今どこにいるの。何という街」

ロレンソ 「いや…詳しいことは、言えない決まりなんだ。機密でね」

ローサ 「でも、まだ前線にいるわけね」

ロレンソ 「エドムンドは優秀だから將軍が手放そうとしない」
ローサ 「気がもめるわ」

ロレンソ 「でもこの通り。長い手紙を預かって。特別の計らいだよ」

ローサ 「嬉しい。聞かせて。今すぐお願い」

ロレンソ 「いいとも」

ローサ 「ああ、また聞けるのね。あの人の声が」

ロレンソ 「親愛なるローサ。その後、変わりはないだろうか。季節が巡り、会うことの出
来ない日々。君への想いが一層強まる。遠く離れても心の中」

ローサ 「私も同じ気持ち。いつだってあなたのことを。いつだって」

ロレンソ 「君の瞳を思い浮かべる。まばゆい光。黒く輝く」

ローサ 「ああ、私のエドムンド。遠く離れても私の胸に。ああ、エドムンド。エドムン
ド。瞬きしてる時ですら、心から離れることのない」

ロレンソ 「今日は夕日に染まった丘の上で君を想った。赤い景色は君と出会った夕日の浜
辺を思い出す。あの日の情景、胸の高鳴り…」

ローサ 「待つて…。エドムンドと出会ったのはフィエスタの広場。どういふこと。まさ
か誰かと間違つて…」

ロレンソ 「(慌てて) いや、ローサ。これはね、比喩だよ…比喩。例えよ」

ローサ 「例え」

ロレンソ 「そうとも。詩だよ。浜辺はきつと波打つ揺らぎを重ねり合わせてるんだろ、自
分の心に。ほら、ゆーらゆーら君への想いを」

ローサ 「そうなの！何てロマンチック。胸に響くわ」

ロレンソ 「そうだろ。とても情緒的な。豊かな表現さ」

ローサ 「ホンとね。私、すべてを捧げたいくなる」

ロレンソ 「一日中、君を抱いていたい。誰にも邪魔されず。薔薇の香りに包まれて。愛し
いローサ。俺のローサ」

ローサ 「ああ、私のエドムンド。永遠に私、あなたのもの。追いかけて、あなたのい
るその丘へ。翔んで行きたい。今すぐ翔んで」

ロレンソ 「今日も一日、無事に終わる。愛するローサ、君は俺の守り神。今日一日命があ
り、明日も一日君を想う。お休み、俺の女神。いつか、この手で君を抱いて。
その日を夢見る。夕日に染まった丘の上で」

ローサ 「想いの言葉が甘く溶けて、抱かれて眠ってしまいそう。ああ、私のエドムンド。

遠く離れても私の胸の中。まるで新たな恋が始まったよう。手紙を受け取るた
び、あの日、出逢ったあの瞬間の…そうよ。あの時の想いが蘇る」

ロレンソ 「新たな恋の始まりか。きつと届くよ」

(こころ奪われて)

♪こころ 奪われて あふれる 想いに

めぐり逢う 愛の 甘いうた

あなたの 手紙を この手に 受けとり

そのまま 胸に抱く

それだけで 今 喜びたいの
生きる証に やすらぎ

抱きしめて こころから 夢でいい
そのまま くちづけ かわす
ふたたびの 恋におち ゆらめいて
永遠誓うわ 愛を」

間奏。

ローサ、ロレンソの手をとり、踊る。

高台に再び、ドラの姿。

「♪こころ 奪われて あふれる 気持ちに
めぐり逢う 愛の 熱いうた
かかれた 文字みて あなたを 想うの
恋する 時なのね
今日の無事を 祈る空から
まばゆい光 降りるわ

抱きしめて 思い出に 酔いしれる
はるかな 時への 旅路
ふたたびの 恋に燃え ゆらめいて
あなたへ贈るわ 愛を」

間奏。

ロレンソ、手紙を渡す。

ロレンソ 「確かに伝えたよ」
ローサ 「(ロレンソを抱き) ありがとう、ロレンソ。私、胸がいつばいで」
ロレンソ 「(緊張) 落ち着け…落ち着け…落ち着け…」
ローサ 「救われてるの、いつも手紙で。気をつけて。アンタが頼りなんだから」
ロレンソ 「任せて。何度だって運んで来るとも！」

ローサ、ロレンソの手を引き、翔ぶように退場。

ドラ、虚しげに姿を消す。

音楽、尚も盛り上がって。

女たち、登場。

(女たち) 「♪La La La…La La La…La La La…
(歌と踊り続く)」

ロレンソ、新たに手紙を持ち、再び登場。

ロレンソ「朝、目が覚めるとお前を思い出してる。一緒に食べたい。お前の作った朝飯を」
女たち、盛り上がりつつ笑い合う。

チタ 「お父ちゃんたら、大事な手紙に食事の話なんて」
クリステイネ「色気より食い気ね」

ミーア 「(目頭を覆い) いいさ。いいさ。いくらだって作ってあげる。あの人の好物を」
ロレンソ 「お前を想い心が燃える。まぶたに焼き付く情熱の踊り。夢ではなく現実に」

チタ 「(ターン) ああ、踊りたい。あの人のために。いつだって準備は出来てるのに」
ロレンソ 「遠くにいて一層思う。君への想い。必ず戻るよ。約束するから安心して」
クリステイネ「ええ。約束よ。早く帰って。一日でも早く」

ミーア、チタ、クリステイネ、退場。
それ以外の女たち、残る。

(女たち) 「La La La...La La La...La La La...
(歌と踊り続く)」

ローサ、再び登場。

ロレンソ、新たに手紙を持ち、ローサの元に向かう。

ロレンソ 「ローサ、ローサ、愛しい君。せつない僕の心。ああ、今すぐにも。ああ、君のそばに。ああ、抱き寄せて。口づけを交わりたい...」

ローサ 「エドムンド！エドムンド！エドムンド！」

ロレンソ 「ローサ、ローサ、愛しい君。激しい僕の心。そう、いつだって。そう、狂おしく。そう、抱きしめて。魂までも翔んで行きたい...」

ローサ 「何て素敵な恋の響き」

ロレンソ 「君への想いがこの中一杯に詰まっているのさ」

ローサ 「この空の下で今日もあの人は生きている。私を想ってくれている。来る日も来る日も私に愛を捧げて。私感じるの言葉の端々から。あの人の熱い心が」

ロレンソ 「ああ。想っているとも。どこにいたって」

ローサ 「私、生きる希望がわいてくる。身体中から力が満ちて。生きていかなきゃ。私、生きていかなきゃね。どんなことがあっても、生き抜いていかなきゃね」

ロレンソ 「そうとも」

ローサ 「あなたもよ、エドムンド。お願いよ、私のエドムンド。私のためにあなた、どうか生き抜いて」

(女たち) 「La La La...La La La...La La La...

(歌と踊り続く)」

ミーア、チタ、クリステイネ、再び登場。

ローサ、合流していく。

ロレンソ、新たに手紙を持ち、向かう。

ロレンソ 「戦場に行けば、色んな人間と出会うよ。その船乗りの男はね、遠い異国に行っただって。東洋の」

チタ 「東洋って」

ロレンソ 「海の向こう。遙か先の。僕らのルーツもそこにある」
クリステイネ 「そうなの」

ロレンソ 「なのに僕らの生活とはまるで違ってるらしい。言葉も街の様子も、姿形や考え
方まで。面白いのはね、東洋では、人が死んでも魂だけは永遠に残って、次の
命に生まれ変わると考えるんだ」

ミーア 「魂だけが残って…。何だか気味が悪い」

ロレンソ 「そうかな。僕には神聖に思える。よく出来たお伽の話の様にね」

ローサ 「私には今生きてるこの世界がすべてよ。この世界に生き、この世界で愛し、こ
の世界で結ばれるの。ああ、エドムンド、早く私に会いに来て」

チタ 「結局はそこにいつちやうね」

ローサ 「そうよ。私の胸の中はあの人のことで溢れてる。ロレンソ、お願い。もう一度」

ロレンソ 「(手紙を読み) ローサ：ローサ：愛しい人。その眼差しを僕に向けてくれ。瞳に
映る僕の姿に胸熱くさせてくれ」

ローサ 「この胸のときめきを。眼差しはあなたのもの。胸が熱く、そして踊る」

ロレンソ 「ローサ：ローサ：僕の女神。熱い言葉、激しい歌声、気高い輝き。僕の身体の
この血の中に、君からの想いが甘く流れる。身体中に君が流れる。ああ、ロー
サ：僕のローサ。僕の心をすべて捧げる」

ローサ 「私、この手紙一つで生きていける。とうとう三年も帰って来なかったけれど、
彼を待つ。エドムンドを。だって、繋がっているんだもの私たち。今、この瞬
間も。この空の下で」

クリステイネ 「私も、お願い。ロレンソ」

チタ 「私も」

皆、口々にロレンソに手紙を求める。

(女たち) 「♪」

抱きしめて もう一度 夢でいい

そのまま くちづけ かわす

ふたたびの 恋におち ゆらめいて

あなたに この愛 とどけ」

一同、ロレンソが手紙を読むのについて行き、退場。

ローサ、残る。

音楽、OUT。

照明、CHANGE。

○パレス・オブ・ローズ

ローサ、手紙を抱いている。

ローズたち、登場。

少年 a 「ローサが恋に落ちたのはこれが初めて。元々、彼女はこの街の生まれではありません。
母親を自分のお産で、父親は流行病でそれぞれ失くし、遠縁の長老に

引き取られ、薬作りの手伝いを」

ローサ、静かに踊り始める。

少年 a 「その宣伝にと歌と踊りで客を呼び込んでいたのが、いつしか評判に。大人びた顔立ちで早くからスター。気高く誰にもなびこうとしなかった彼女は、どんな相手にも指一本触れさせることすらなかったそうです」

ローサ、退場。

少年 a 「それがあの晩、ファイエスタの夜。エドムンドと運命の出会いを。流れ着いた余興のカンタオール。大きな体にしゃがれたハスキーボイスで、男くさくて強烈な存在。いきなりローサの唇を奪って男たちの度肝を抜いたとか」

ケワイ、口笛を鳴らす。

少年 a 「皆が平手で返すと思っていたところ、当の彼女は真っ赤な顔で、そのまま走って逃げ出したそうです。翌日には海辺を歩く二人の姿が。恋に落ちたのはローサの方でした」

ケワイ 「ああ：まあね。そんなもんなのよ。得てして」

ローズ 「エドムンドが出征するまではどれくらい」

少年 a 「一と月なかったようです」

コロモ 「それでよく行ったわね。一人きりの志願でしょ」

少年 a 「それがエドムンドという男。軍の要請に真っ先に名乗りを上げて。ローサの止めるのも聞かず、そのまま行列の中へ。待ってると言だけ残して、戦場へ向かったそうです」

「クラつときそう…。そりゃ、印象強い」

ケワイ 「ローサはローサで、次の日からはもう、いつもの冷ややかな顔つきに戻って、黙々と踊り始めたそうです。再び、誰にもなびこうとせず」

コロモ 「それもまた：相当なタマだわ」

ローズ 「彼女にとってはいつだって、歌と踊りだけが自分を保ってられる息吹だわ。それが彼女の人生。それが生き方」

少年 a 「あなたにはそれが分かる」

ローズ 「分かるかどうか。でも、少なくとも私の血にはそれがあつた。きっと彼女、そういう風にしか生きられなかった」

ケワイ 「ロレンソは」

少年 a 「ずっと眺めているだけでした」

ローズ、徐に動きが止まる。

少年 a 「どうしました」

ローズ 「先刻から私、耳の奥で気になる歌…。何度も繰り返して」

コロモ 「歌。どんな歌です」

ローズ 「それはつきりとは。いたむのが…。いたむのが…。繰り返してばかり」

少年 a 「それはきっと、あなたの記憶の奥に残った、彼女の歌です」

ローズ 「ローサの」

少年 a 「はい」

ローズ 「ロレンソがローサの歌を」

少年 a 「聞かせようと」

ローズ 「何故」

少年 a 「それを知るために僕はここまで。少なくとも今日、この日を逃してはいけなかったはずなんです」

ローズ 「どうして」

少年 a 「あなたが去ってしまったところだったから。僕はそれを知りませんでした」

ローズ 「どういう意味…」

少年 a 「これを偶然だとあなたは思いますか」

間。

ローズ 「待つて…。私にどうしろっていうの。結論はもう出した。私、明日からの答えを変える気、ないのよ」

コロモ 「ローズさん」

ローズ 「そんな気ないの。ハッキリ言っておくけど」

少年 a 「何故です」

ローズ 「何故って。これは私の人生。私の生き方。私は今を生きてる。自分の結論はもう出した」

ケワイ 「しかし…」

間。

ローズ 「今日は不思議なことが続いて、少しのぼせていたのかも。これで終わりにしましょう。リースの逸話には十分じゃない」

コロモ 「ローズさん…」

少年 a 「ロレンソです」

ローズ 「もういいわ」

奥の通路にロレンソ、登場。

少年 a 「街から街を尋ねて歩くロレンソの姿が」

ローズ 「やめましょ」

少年 a 「その旅ごとに北へ北へと足を延ばして。進めば進むほど戦場は荒れています。それでも彼は進み続け。そんな姿が」

ピアノ弾 「俺も見えるんだがね…そのイメージ」

ケワイ 「ホンと！」

コロモ 「私は…女の人」

ケワイ 「え！」

別のエリアにローサ、登場。

コロモ 「歌ってる」

ケワイ 「どんな。どんなよ」

コロモ 「いたむのが…いつでも…」

ローズ 「その歌」

ケワイ 「ねえ、どんなのよ」

コロモ 「静かにしてよ。横でゴチャゴチャされたんじゃ、聞こえなくなるじゃない」

ロレンソ、退場。

少年 a 「僕の右目も先刻からひどく騒いで」

ケワイ 「ねえ、何でアタシだけ」

少年 a 「ロレンソはどうです」

ピアノ弾 「それが……。慌てた様子でどこかへ」

ローズ 「また聞こえる。いたむのが……。いつでも……。やさしい心なら……」

コロモ 「古くから伝わるヒターノの歌かしら」

ケワイ 「知りませんがごましますけど」

コロモ 「アンタ、何すねてんのよ」

ケワイ 「アタシにはそういう気がないのよ。そういう高尚な気が。ああ、もううるさいわね、先刻から！」

コロモ 「アンタじゃないのよ、うるさいのは」

ケワイ 「だってこの鐘の音」

コロモ 「鐘なんて鳴ってやしないわよ」

ケワイ 「鳴ってんじゃないのよ。先刻からカランカラン、カランカラン」

少年 a 「それ。あの街の教会の鐘です」

ケワイ 「ええー！」

少年 a 「誰かが打ち鳴らしてる」

ケワイ 「繋がってたの、アタシ」

少年 a 「このリースが掛かった扉が見えて来ませんか」

ケワイ 「(指差し) うん。そこ」

十字架が現れる。

ケワイ 「それから、そこに広場があつて。ここんところに水飲み場があつて」

コロモ 「何よアンタ、一番見えてんじゃないの」

ケワイ 「だって、まさかこれがそれだとは思わないから」

ピアノ弾 「逆にこれだけ見えてて、思わない方がどうかしてる」

ケワイ 「だってさア」

ローズ 「一寸、待ってよ……この歌：段々、鮮明になって！」

少年 a 「やはり、ロレンソは必死になってあなたにメッセージを！」

ローサ、退場。

ケワイ 「待って！」

少年 a 「どうしました」

ケワイ 「何だかこの鐘、様子が変よ」

コロモ 「変」

ケワイ 「そうよ。やたらと鳴り響いて騒がしいったら。誰かがみんなに知らせてるの」

コロモ 「何を」

ケワイ 「危険を。そうよこれ！警鐘じゃない。何かあったのよ、きっと！」

照明、CHANGE。

イントロ、START。

少年 a たち、退場。

ローズ残り、まっすぐ前方を見据えている。

○教会前の広場

激しく鳴り響く、教会の鐘。

何事かと女たちが集まって来る。

ドラ、かき分けるよう中心に登場。

ドラ 「みんな集めて。早く！早くよ」

ミーア 「チタ！ローサを。ドラがこんなに言うからには」

ドラ 「荷車を。必要なものだけ荷物に積んで」

クリステイネ 「何なの」

ミーア 「どうするつもり」

ドラ 「この街を離れるの。今すぐに」

ミーア 「街を」

クリステイネ 「一寸、待って」

ドラ 「時間がない」

女たちが声を上げて駆けこんで来る。

女1 「隣村から人が」

女2 「逃げて来たって。そろもう、ひどい格好で」

ミーア 「何があったの」

女1 「分からない。みんな泣き叫んで」

悲鳴を上げて女たち、集まって来る。

クリステイネ 「でも街を離れたら私たち」

ミーア 「もし、夫が帰って来ても会えないんじゃない」

ドラ 「生きてこそ会えるのよ」

ミーア 「生きてこそって」

ドラ 「きつともうすぐここにフランス軍が」

クリステイネ 「何ですって！」

女たち、騒然となる。

ローサ、チタに連れられ、駆け込んで来る。

ローサ 「どうしたの！」

ミーア 「ドラが」

クリステイネ 「この街を出るって」

ドラ 「急いで」

クリステイネ 「連合軍は優勢じゃなかったの」

ドラ 「私のカードを信じるなら、今すぐに」

間。

ローサ 「荷物を積んで」

クリステイネ 「ローサ」

ローサ 「ドラを信じるわ」

ミーア 「分かった。こうなりや、考えてる暇はない」

ローサ 「そうよ、急いで」

チタ 「みんな！みんな！」

女たち、方々に散って。

少年 a たち、登場。

少年 a 「ローズさん！」

ローズ 「聞こえるの！今、完全に私の中で！」

ローズ、まっすぐ前方を見据えている。

(MUJICA)

(ローズ) 「♪

思い出ながれる あの日の 舞踏祭

真夜中すぎの パレードに 人の波 のまれて

あなた 瞳あわす途端 腕を ひきよせて

胸に 抱きいれ ささやく 愛の言葉から

はじめて かわすキス

ながれる星たち 見つめる 時忘れ

はげしく 夜を越えるの

ふたり 永遠の愛 誓って

あつい 吐息はいて MUJICA

愛に からだまかせ おぼれる

抱かれ 腕のなかで MUJICA

声が あつく漏れて もだえる

いのち 燃やす時よ MUJICA

ふたりで つきぬける NOCHE」

少年 a 「繋がりました！今、あなたとローサの記憶が！」

間奏。

砲撃の音。

悲鳴を上げて荷車に集まる女たち。

少年 a たちが驚いて辺りを見回している。

チタ 「軍隊だ！本当に現れた！」

ミーア 「みんな揃ったね」

クリステイネ 「行きましようよ」

ローサ 「待って！目印を」

ミーア 「目印」

ローサ 「置いて行きたい。留守の間に男たちが帰っても分かるように」

ドラ 「(リースを持ちだし) これでいい」

ローサ 「それはいつかの」
ミーア 「だったら、どこか目立つところに」
クリステイネ 「あそこは！十字架の上」
ミーア 「そこでもいい！さあ、急ぎな。チタ、手伝っておやり」
ドラ 「急いで」

ローサとチタ、退場。

砲撃の音。

女たちの悲鳴。

クリステイネ 「お母ちゃん、どっちへ」

ミーア 「どっちって、アンタ」

クリステイネ 「向こうに人が流れて行ってる」

ミーア 「でも、あっちにも人が」

荷車、方向を決めようと右往左往する。

十字架にリースが掛けられる。

チタ 「出来た！」

ミーア 「(進み出す) 行くよ。急いで！」

ドラ 「そっちじゃない！西よ」

突如、ロレンソが飛び込んでくる。

ロレンソ 「ローサ！」

ローサ 「ロレンソ！」

ロレンソ 「そっちはダメだ！行っちゃいけない」

ドラ 「兄さん！止めて」

ロレンソ 「ミーア！西へ向かえ！向こうはもうフランス軍が包囲を」

ローサ 「ロレンソの言う通りに！」

ミーア 「西！西って、どっちだい」

ミーアたち、混乱しながら荷車の方向を変える。

整然たる足音の波、聞こえて来る。

♪

涙があふれる 夜明けの 霧の街
優しい声で ささやくの 今すぐに 会えるさ
とおい 時の たそがれ あの日 思い出す
愛という名の ともしび 指を 近づけて
ぬくもり 感じたの

消えゆく月かげ 見つめる 時忘れ
はげしい 夜を 越えたわ
あの日の ふたり はじめて ひとつに

あれは 夢の中ね Mujica
愛の あつい涙 ながれる

いつか とおい記憶 Mujica
胸に 抱いた想い ひかれる

あなた 旅の空で Mujica
いつも わたしだけを 想って ー

ローサ、戻って来る。

ロレンソ 「ローサ！」

ローサ 「フランス軍がもうすぐそこまで！」

ロレンソ 「よし！出発しよう」

ミーア 「みんな押して！」

チタ 「せえの！」

ローサ 「みんな！はぐれるんじゃないよ。しっかりつかまって！」

砲撃の音。

女たち、悲鳴を上げて。

ロレンソ 「ローサ！」

ミーア 「ローサ！」

ローズ 「ローサ！」

ローサ 「(天を仰ぎ)！？」

ローズ 「親愛なるいにしえのあなた！私はあなたと繋がっています！」

♪あれは 夢のなかね Mujica

愛の あつい涙 ながれる

いつか とおい記憶 Mujica

胸に 抱いた想い ひかれる ー

ローズ 「親愛なるいにしえのあなた！私の声が聞こえますか！私のこの声が！」
ローサ、どこからか聞こえる声に、天を仰いでいる。

♪あなた 旅の空で Mujica

いつも わたしだけを 想って

想って 想って… ー

整然たる足音の波、近づく。
急激なる暗転。

※(2)※

整然たる足音、再び大きく。
溶明。

数名のフランス兵、行進して舞台を横切る。

ホセ、ダビド、登場。

うかがえる憔悴と緊張の面持ち。

ホセ 「ダビド」

ダビド 「ホセの親父さん！」

ホセ 「フアビアンは」

ダビド 「すぐそこ。ハイメも一緒に」

ホセ 「今度こそは最後かと思った」

ダビド 「あんなにすげえ大群、初めてだ」

ホセ 「出撃命令は」

ダビド 「出てるさ。北へ一気に進めとさ」

ハイメとフアビアン、飛び込んでくる。

ハイメ 「追手が来るぞ」

ホセ 「ハイメ、フアビアン」

ハイメ 「親父さん。ここにいたのか。心配したよ」

ホセ 「フアビアン、どうした」

ダビド 「こいつ昨夜から様子が」

フアビアン 「昨夜、この手で三人殺した。最後の顔が臉に残って…。消えないんだよ！」

ホセ 「忘れる。襲撃のたびにそれじゃ身が持たねえぞ」

ダビド 「この戦争はまだ続くんだから」

フアビアン 「こんなはずじゃなかったのに。村を出た時は一と月もあれば戻れるって」

ホセ 「弱音を吐くな。今に終わらア」

フアビアン 「俺の殺した三人だって、国に帰りやカミさんも子供もいるだろうに…」

ダビド 「言うな。野郎たちだって散散、こっちの仲間を」

フアビアン 「いつまで経ったって戦なんてものは！皆、会いたくないのかよ。女房子供に」

ハイメ 「本気で言ってやがるか、手前ェ！」

ホセ 「やめろ！」

フアビアン 「クリステイネ！クリステイネ！クリステイネ！」

ホセ 「何だ」

ダビド 「まじないだつてさ。こいつの」

ハイメ 「不思議と弾に当たらない」

ホセ 「本当か。ミィア！俺も真似したぞ（笑）」

ダビド 「イリス！」

ハイメ 「チタ！」

ホセ 「な、フアビアン、ちったア落ち着け。じきに帰れる日も来るから」

足音、聞こえてくる。

ダビド 「追手だ」

ホセ 「散らばれ。街のはずれで合流しよう」

ハイメ 「あそこにはフランス軍のバリケードが」
ホセ 「だからってお前エ。突破するしかねえだろ。この四人で襲撃よオ」
ダビド 「やるしかないな。やるしか」

男たち、散々に退場。
足音、近づく。

数名のフランス兵、行進して舞台を横切る。

ローズと少年 a たち、登場。

少年 a 「感じますか。戦場の姿」

ローズ 「何て有様。こんなにひどい光景」

ケワイ 「女たちは」

少年 a 「来ました。すぐそこに」

ローサを先頭にヒターナたち、登場。

荷を積んだ荷車を引いている。

各々、武器となるスキやこん棒を手になっている。

ドラ、カードをめくりながら行く手の方向を指示。

(I said clearly this much)

(女たち) 「A—h a—h a—h…」

(ローサ) いざ進め その瞳 前を 見開いて

(クリステイネ) 疲れ果て なえる足

こころ 折れるけど

(チタ) いざ進め この道を たとえ 怖くても

(ミーア) 踏み出せば その一歩が いのち 刻んでく

(女たち) as long as the force (力の限り)

(クリステイネ) ふるいたて dream again (夢をふたたび)

(女たち) We shine the darkness (闇を消し去れ)

(チタ) 生き抜いて only one wish (たった一つの願い)

(女たち) on his chest one day (いつの日か彼の胸に)

(ミーア) とびこむわ the dumping all (体ごと)

(ローサ) それだけが 生きる望み 日はまた昇る

don. t give up

(女たち) I said clearly this much (これだけは

はっきりと言える)

あなたへの愛 偽りはない

わたしの想い 変わりはない

Now just step out (わあ、一歩踏み出せ)」

間奏。

ミーア 「道が分かれてる。どっちへ！」

チタ 「右よ右」

クリステイネ 「いいえ。左よ、きつと」

ローサ 「ドラ」

ドラ 「(カードをめくっていく) 左。そのまま進んで」

進んだ先からロレンソ、駆け込んで来る。

ロレンソ 「1キロ先に家畜小屋が。一旦、そこで様子を。僕がその先をまた見て来るから」

ロレンソ、退場していく。

ローサ 「ロレンソ！」

ドラ 「兄さん！やめて、危ないわ」

ロレンソ、聞かずに走り去る。

ミーア 「行くよ！このまままっすぐ」

女1 「フランス軍に見つかったら最後。若い女を手当たり次第、乱暴するってさ」

女2 「逆らえば、簡単に殺すって」

女1 「私、嫌よ。こんな刃物なんて人に向けるの」

女2 「子供が飢えて死んでもいいの！」

チタ 「ガタガタ言わないでもらいたんだな。ここから誰も欠ける人間を出したくないんだからさ」

ローサ 「はぐれるな！みんな、しっかりついて来て」

女たち、退場していく。

数人のフランス軍が行進して舞台上を横切る。

男たち、駆け込んでくる。

(男たち) 「♪

いざ進め この腕に 勝利 つかむまで

誓いあう 合言葉 倒せ ナポレオン

いざ進め この道を たとえ 嵐でも

踏み出せば その一歩が 命 燃やしてく

as long as the force (力の限り)

振りあげろ high the fist (拳を高く)

We shine the darkness (闇を消し去れ)

生き抜いて only one wish (たった一つの願ひ)

To your original one day (この日かお前のちぎり)

まいもどる in one body (からだごと)

それだけが 生きる希望 日はまた昇る don. t give up

I said clearly this much (いれただけははっきり言えぬ)

おまえへの愛 偽りはない

おれの心は あの日のままき
Now just step out (さあ、一歩踏み出せ)」

間奏。

聞こえる足音。

男たち、敵の襲撃に緊張を張り詰めている。

ロレンソ、辺りの様子を注意深く見ている様子で舞台を横切る。

女たち、警戒しながら再び登場。

ローズ 「何か始まるのね」

少年 a 「分かりません」

コロモ 「何だか怖い」

(女たち) 「As long as the force (力の限り)

(クリステイネ) ふるいたし dream again (夢をふたたび)

(女たち) We shine the darkness (闇を消し去れ)

(チタ) 生き抜いて only one wish (たった一つの願い)

(女たち) on his chest one day (いつの日か彼の胸に)

(シーア) とびこむわ the dumping all (からだごと)

(ローサ) それだけが 生きる望み 日はまた昇る

don. t give up

(女たち) I said clearly this much (これだけははっきりと言える)

あなたへの愛 偽りはない

わたしの想い 変わりはない

Now just step out (さあ、一歩踏み出せ)

(ローサ) それだけが 生きる望み 日はまた昇る

don. t give up」

ロレンソ、女たちの元に飛び込んでくる。

ロレンソ 「逃げるんだア！いいからこつちへ！車なんか置いていけ」

悲鳴を上げて周囲に散らばる女たち。

ケワイ、コロモ、ピアノ弾、退場。

フランス軍、行進してくる。

フランス軍、荷車を倒し荷が散乱。

男たち、フランス軍に猛然と襲いかかる格好。

男女それぞれの激しい戦闘(ダンス)。

ローズ、ローサと目が合う。

全ての音、STOP。

お互い、驚いた様子で顔を見合わせる。

ローズとローサ「この人は、私が毎晩、夢で見た人。遠い異国の」

ローサ、ロレンソに手を引かれ、女たちの元へ。

ローズ、少年に手を引かれ、退場。

クリステイネとファビアン、舞台前面に飛び出してくる。

クリステイネ「ファビアン」

ファビアン「クリステイネ！クリステイネ！クリステイネ」

お互い、前方を見据えて。

クリステイネ「ファビアン、あなたはどこ」

ファビアン「会いたい。クリステイネ。今すぐに」

クリステイネ「愛してる。愛してる。ファビアン、あなたのことを」

ファビアン「クリステイネ、飛んで行きたい、君のその胸に」

クリステイネ「ファビアン。聞こえる、私の声。ファビアン」

ファビアン「クリステイネ。聞こえるか、僕のこの声。クリステイネ」

クリステイネ「愛してる。愛してる」

ファビアン「愛してる。愛してる」

イリスとダビド、それぞれ飛び込んでくる。

イリス 「危ない！」

ダビド 「逃げる！何やってんだ」

銃声と砲撃の音。

皆の悲鳴。

静まると同時にイリスとダビドの死に気づく。

クリステイネ「姉さん！」

ファビアン「ダビド！」

ミーア 「あああああー」

皆が集まって来る。

怒号や悲鳴。

ホセ 「馬鹿野郎：馬鹿野郎：馬鹿野郎」

ファビアン、絶叫。

ハイメ 「また来るぞ！皆、逃げる！」

連続する銃声と砲撃の音。

(男、女たち)「A」

I...I...I...I said clearly this much

あなたへの愛 偽りはない

わたしの想い 変わりはない

Now just step out (やめ、一歩踏み出せ)

I said clearly this much (いれただけははっきりと言えぬ)

おまえへの愛 偽りはない

おれの心は あの日のままさ
Now just step out (さあ、一步踏み出せ)
Now just step out 』

ローサ、倒れこむ。
ロレンソ、勢いよく駆け込んで来てローサを抱える。
そのまま、舞台中央に進み、屈みこむ。

男たち、女たち、声をあげて襲いかかるように散々、退場。
ローサとロレンソだけが残る格好。
ローサ、気を失ったように倒れこんでいる。
ロレンソ、恐怖で震えながらもローサを抱えた手を離さない。
大砲撃音の後、静寂。
照明、CHANGE。

月明かり。
周囲に壊れたバリケードが散乱している。
ローサ、ロレンソに抱えられたままの格好で眠っている。
ドラ、子守唄を囁くように。
女たち、静かに登場し、一人また一人と舞台後方にかたまり眠りにつく。

(夢みさせて)

(ドラ)「♪

月のあかり 音もなく やさしく降りる
ふかい静けさは 天使のやすらぎ
皆ねむりについたわ

苦しみや 悲しみは いまは忘れて
あまい夢の中 儂いまぼろし
抱きあう恋人たち
さあ 心いくまで くちづけ かわして
めくるめく愛のとき もいちど 一つになって

また朝がきて この世界に 目覚めるから
それまでどうか あわい恋の 夢みさせて
Lu Lu Lu...Lu Lu Lu...Lu Lu Lu...

あなたにあう それだけが 生きる希望よ
いまは夢だけで 儂いまぼろし

夜ごとともめあうわ
さあ あの夏の日に 心を もどして
めくるめく愛のとき よろこび 二人のいのち

かげる月の あかり薄く ともす時よ
どうか醒めずに あわい恋の 夢みさせて
Lu Lu Lu...Lu Lu Lu...Lu Lu Lu...
Lu Lu Lu...Lu Lu Lu...Lu Lu Lu...

やさしさと 温もりは いまも心に
愛の戯れは 儚いまぼろし 夢見るひと時だけ
さあ 心の中に 咲かせ 薔薇の花
めくるめく愛のとき 花びら 激しく散って

夜明けの前の あかつき空 消えいく星
あなたは涙 流しながら 目を覚ますわ
それまでどうか あわい恋の 夢みさせて
Lu Lu Lu...Lu Lu Lu...Lu Lu Lu...
Lu Lu Lu...Lu Lu Lu...Lu Lu Lu...

ロレンソ、疲れ果てた様子で立ちあがる。

ロレンソ 「クリスティネは」

ドラ 「ようやく眠った」

ロレンソ 「ひどい一日だった」

ドラ 「可哀想に。彼女、すっかり気を落として」

ロレンソ 「まさかイリスがあんなことに」

ドラ 「しっかり者の長女だった」

ロレンソ 「ミーアもさぞや落ち込んで…」

ドラ 「取り乱して。見ていられないくらい」

ロレンソ 「ケガ人も大勢出たな」

ドラ 「これが戦争なのね。もう、うんざり…」

ドラ、後方の女子たちの元に。

ローサが目を覚ます。

ロレンソ 「どうした」

ローサ 「夢よ。エドムンドが出征していった日の朝の。今でもよく見るの」

ロレンソ 「よし。それなら、また手紙を。エドムンドからの（手紙を取り出す）」

ローサ 「…」

ロレンソ 「愛しいローサ。僕の心には君しかいない。君の幸福を心から願う。君の無事を心から祈る。愛しいローサ。君は今、眠れているだろうか。不安な夜を過ごしていないだろうか。僕は今、月の明かりに照らされて、眠りにつくその瞬間まで君のことを想っている。だから、ゆっくりお眠り。僕の心には君が…女神の

ような君の…」

ロレンソ、黙って背を向けているローサに気づく。

ロレンソ 「ローサ」

ローサ 「もういいの…」

ロレンソ 「え…」

ローサ 「聞きたくない」

ロレンソ 「ローサ」

間。

ローサ 「私…すっかり、待つことに疲れた」

ロレンソ 「…本当かい」

ローサ 「疲れたの…。だって…五年…五年なんて…。いくら何でも長すぎるじゃない！」

ロレンソ 「それは、うん。確かにね。長すぎる」

ローサ 「私、待ったでしょ。待ったわよね。不実な思いも抱かずに」

ロレンソ 「ああ。それは。間違いないよ」

ローサ 「もうこの辺りで終わりにしたいの、私」

ロレンソ 「ローサ」

ローサ 「ホンという私、今じゃ何かある度、真っ先にアンタのことが頭に浮かぶ」

ロレンソ 「ぼ…僕の」

ローサ 「だって、私に何かあった時、いつだって真っ先に駆けつけてくれるのはアンタ

だもの。いつの頃からか、私、アンタを…」

ロレンソ 「本…本当かい」

やや間。

ローサ 「エドムンドは…手紙だけが胸を熱くさせるけど。これ以上、会えないの…辛い！」

ロレンソ 「…」

ローサ 「もういいの！どうだって！あの人は甘い言葉はくれるけど、決して会いに来て

くれない。一度だって姿を見せては。どこ。どこなの。どこにいるのよ、あの

人！」

ロレンソ 「ローサ…」

ローサ 「私、もういいの！こんなに毎日心を掻きむしられて待っているより、いつそ終

わりにしたいのよ！これが私の本心。心の声なの」

ロレンソ 「…」

ローサ 「いいのよ。本当。今では私、あの人のこと何とも想ってや…」

ロレンソ 「ローサ…」

(ふり返らず)

♪すがりつく記憶から 今日でお別れよ

あなたへ なみだも 枯れ果てた

わすれるわ いいの 愛のない 日々なもの

あらたな 道のり歩むから

ああ ふり返らず

残った思い出 このまま捨てるわ
せつない想いに 押しつぶされた
苦しみは すべてわすれたい
泣いた過去に さよならするわ
きつとできるはずよ

まぼろしの憧れに 今日でお別れよ
あなたへ 愛も 疲れたわ
さようなら いいの 意味のない 日々だもの
わたしは 未来を生きるから
ああ ふり返らず
もいちどしあわせ もとめて行くから
あなたにはもう 未練はないと
言いきれる すべてわすれたい
あつい想い さよならするわ
きつとできるはずよ

せつない想いに 押しつぶされた
苦しみは すべてわすれたい
泣いた過去に さよならするわ
きつとできるはずね…

ローサ、手紙を取って胸に抱く。

ローサ 「愛してる…愛してる…私、やっぱりエドムンドを…！。この胸がつぶれるくらい私、あの人のことを」

ロレンソ 「泣いておいで。僕はここで…」

ローサ、駆け出し、退場。

ロレンソ、それを見送る。

ドラ、静かにやってくる。

ロレンソ、ドラの視線を背中で感じ。

ロレンソ 「…そんな目で見るな」

ドラ 「…」

ロレンソ 「時期を見て海岸線に。あとはゆっくり故郷を目指せ」

ドラ 「兄さんは」

ロレンソ 「…」

ドラ 「まだ探す気」

ロレンソ 「もちろん」

ドラ 「…これだけは言うておく。最近引いた気になるカード。出たのは塔の絵だから」
ロレンソ 「塔」

ドラ 「占星術では神の家：火星を意味するのよ」

ロレンソ 「分からないな。意味は」

ドラ 「悲嘆」

ロレンソ 「つまり…」

ドラ 「早く終わりにしないと災いが起きるの」

ロレンソ 「(微笑んで見せ) 今更遅いや」

間。

ドラ 「彼女に手紙を読み聞かせてる時の兄さんの顔、とても幸せそう」

ロレンソ 「…」

ドラ 「伝えているのは、彼女を喜ばすためかしら」

ロレンソ 「…」

ドラ、退場。

ロレンソ、ローサの去った方を再び見直し。

静寂の長き間。

(想い) ※ a k a p p e l l a から徐々に伴奏が入る。

♪ 遙かな想い だれにも言えず

胸の奥しまつて あなたを見つめる

秘めたる想い 心せつなく

眠れぬ夜を越え

季節だけが すぎいく

一度でいい つたえたい

孤独な愛を 熱いこの胸

あふれる想い いつも抱いて

わたしの恋 知らずや

いとしい 麗しあなたよ

せつなる想い 心慕いて

涙の夜もまた

永遠(とわ)の 時のなかに

一度でいい つたえたい

孤独な愛を 熱いこの胸

祈れる想い いまも巡りて

消えゆく星のもと

とどかぬ わたしの夢よ

一度でいい つたえたい

孤独な愛を 熱いこの胸

遙かな想い だれにも言えず

胸の奥しまって

旅立とう ひとりきりで」

ロレンソ、静かに一人、去り。

暗転：深く、濃く。

※(3)※

○パレス・オブ・ローズ

少年 a、登場。

周りにローズたち。

少年 a 「ナポレオンはこの頃、ロシア遠征に失敗しました。長く続いたこのイベリア半島の戦いもいよいよ終わりが見え、双方、死に物狂いで最後の総力戦を。時代の波は大きく変わろうとしています…」

奥の通路に倒れて行く人々のシルエット。

ピアノ弾、静かにギターを奏で始める。

少年 a 「街の中は暗い影が落ちて：食糧難と争いで盗みも病も横行し、市民は皆、生きていくのがやっとの生活」

女たちが一人また一人と集まって来る。

少年 a 「街を外れると、軍の統制もほとんど機能していません。行き倒れや負傷兵は身ぐるみを剥がされ、闇の市場で取引されます」

女たち、地面を鳴らし始める。

後から続く女たちも合流していく。

少年 a 「水不足や物価高でいさかいが絶えず、小麦一袋で泣きわめく光景があちこちで。住む家を失った家族や老人、娼婦もいれば孤児もいます」

リズムカルな手拍子も加わっていく。

ローズ 「女たちは…」

少年 a 「用心のため、昼間はなるべく森の陰へ。夜、人々が寝静まる頃を見計らって静かに動き出します。一日の行程を短くしてでも」

ミーア、チタ、クリステイネも加わり、リズムをとる。

少年 a 「ローサとミーアは時々、街に出て、薬を売って食べ物と交換して回ります。何人か連れて闇市で商売をすることも」

ローサ、登場。

照明、CHANGE。

踊りとギターの音、一気に盛り上がる。

女たち 「(二斉に掛け声) はいー!」

女たち、STOP。

照明、戻る。

ギターの音、元の調子に。

少年 a 「それでも、全員が満足に食事にありつけるのは難しく。途中、病気や栄養失調で何人も倒れ、その度、薬になる薬草を調達に。足並みを止め、回復するまで森で潜みます。誰も見捨てることなく」

女たち、動き出す。

少年 a 「だから、皆、ローサに対しての信頼は厚く、女たちの結束は更に強くなっています。飢えと渴き、貧困と悲しみ。戦争の姿はいつの時代も同じ。その中を私たちの荷車が通り過ぎて行くのです」

残りの女たちが荷車を引いて来る。

少年 a 「皆、故郷に帰りたいという一心。ただ、それだけで」

女たち、合流して。

ギターの音、OUT。

○道

イントロ、START。

夜霧の中、荷車を引き始めるローサたち。

皆、一様に足取り重く、消沈している。

ローサたち、入れ替わるように静かに退場。

(さまよい旅)

♪わが故郷 遙か さまよい旅よ

なつかしい 景色 今はまぼろし

何気ない日々が こんなにせつない

山なみ 街かど なぎさ ながれる雲

あなたの 愛も とおい思い出

しあわせが この手から こぼれる

Min Min... Min...

この胸は 寒く さまよい旅よ

つかれ果て 涙 どこまで歩く

何気ない日々が こんなにせつない

眼差し 微笑み うたう こどもの声

あなたの 瞳 忘れはしない
しあわせを いつの日か ふたたび

Mm Mm... Mm...

夢去りし 散った さまよい旅よ
あてどない 道を 歩むむなしさ
何気ない日々が こんなにせつない
温もり 優しさ ともに にぎる手と手

あなたの 声を 今すぐ聞かせて
しあわせが きつとくる 希望を

愛する 故郷 わたしを救え
しあわせに みちびいて ふたたび

Mm Mm... Mm... 」

ローサ 「近頃、夢を見るの」

ドラ 「エドムンド」

ローサ 「それが違う。変わった夢。不思議な夢」

ドラ 「不思議な」

ローサ 「どこか遠い、異国の夢。だって、見たこともない建物や格好をしているもの。

それが何故だか…私と心が通じているような。そんな夢よ。とても不思議な」

ドラ 「待ってそれ、とても気になる」

ローサ 「え」

ドラ 「待って。今、カードを開いてみるから」

ローサ 「夢なのよ。しかも、見たこともない場所で」

ドラ 「やっぱりそう。見て。あり得ない並びをしている」

ローサ 「そうなの。分からないけど」

ドラ 「繋がっているの。その人、あなたと」

ローサ 「どういうこと」

ドラ 「とてつもなく長い時間をかけて、あなたは意中の人と出逢う」

ローサ 「エドムンド」

ドラ 「違う。もっと繋がり強い人。壮大な曲線を描いてあなたは巡り逢う。もう一人のあなたと」

ローサ 「もう一人の私」

ドラ 「そう出てる。こんなの私も初めて見た」

ローサ 「あの異国の人が私だっていうの」

ドラ 「呼びかけてごらんなさい。きっと答えが返って来るから。あなたとその異国の夢とが繋がりを見せた時に」

ローサ 「繋がり」

女1 「もう嫌私、これ以上！どうせ、どこまで行ってもたどり着きやしない」

女2 「立ちな。さあホラ！苦しいのはあんた一人じゃない」

女1 「嫌！もう沢山。うんざりよ！どこへ行っても死人や行き倒ればかり。村という村も滅茶苦茶に荒らされて。もう何も残ってやしない！きっと、私たちの街も家も：私の大事なあの人も、どうせ帰って来やしない」

女2 「馬鹿！黙って聞いてりや、好き勝手に泣き言ばかり。みんながどんな思いで黙って耐えてると思ってるのさ」

ミーア 「どうしたの」

クリステイネ 「仕様がなのよ、この子ったら」

ミーア 「許してやって。この子、昼間に自分の恋人と似た行き倒れを見てしまったの」

女1 「みんなみんな無くしてしまった！村も楽しかった日々も。私の大切なあの人も」

ローサ 「この海岸線を東に進めば、必ず村にたどり着く。きつともうすぐだから」

女1 「そう言っつていつまで歩くの。一と月？それとも二月」

チタ 「静かにしな！周りに誰がいるか分かんないんだよ」

女1 「だったら、ここで放つて行って。私、一人でのたれ死ぬから」

女2 「まだ言うのかい！あんたつて子は」

クリステイネ 「やめて！落ち着いてよ」

ミーア 「あんたが熱でうなされた時、誰が世話を！皆が足を止めて薬を作って、ようやく命を取り留めたんじゃないの。恩を感じろとは言いやしないが、運命に感謝するくらいの器量は持てないのかい」

女1 「分かってるわよ。だから放つておいてと言ってるの」

女2 「まだ分かんないのかい、コノ！」

飛び掛かり、もみ合いに。

クリステイネ 「やめなさいよ。やめて」

女1 「(泣き叫ぶ) 地獄よ！地獄よ！もう嫌」

チタ 「ねえ！見て」

ローサ 「どうした」

チタ 「あそこ。あそこよ。ホラ！」

薄暗い中、霧の向こうに浮かび上がる薔薇のリースが掛かった十字架。
クリステイネ「薔薇だ。私たちの赤い薔薇のリース！」

ミーア 「どこ」

チタ 「帰って来た！とうとうたどり着いた！」

ミーア 「ホンとだ！私たちの故郷へ」

歓声。

抱き合っつて喜ぶ、女たち。

クリステイネ「でも、よく見て。街中：めちやくちやに壊れて何もなし」

ローサ 「やり直せばいいじゃないの。みんなで一から」
チタ 「そうだ。やり直そう。もう一度」

ミーア 「ここにいりゃ、いつか必ず男たちが戻るんだから」
クリステイネ 「そうね。そうだね」

チタ 「いつか！必ず」

ローサ 「兎に角、帰って来たんだ。私たち」

女たち、退場。

遠くで聞こえる砲撃や怒号の声。

シルエットだった奥の通路に照明、I N。

ロレンソ、登場。

戦場を掻い潜り、倒れた男たち一人一人の顔を確認している様子。

市民兵、通り過ぎる。

市民兵1 「ロレンソ、警戒して歩けよ」

市民兵2 「フランス兵の残党が、まだこの辺りをウロウロしてる」

ロレンソ 「君らもな。手紙があるなら預かるよ」

市民兵、笑顔を見せて退場。

ロレンソ 「愛しいローサ。僕のローサ。遠く離れた空の下で、今日も君のことを想っている。この街もまた見るも無残な姿に。乱暴に壊されて草木もない。皆はどうしている。ドラは、ミーアおぼさんは。故郷にはもう辿り着いただろうか。僕はここから今すぐにも飛んで行って、君を抱きしめたいよ。このありさまは決して天国とは言えないけれど、愛しいローサ。僕のローサ。いつかきつと君が振り向いてくれる場所へ。愛しいローサ。僕のローサ。君は僕の女神。いつだって。いつまでも」

ロレンソ、いきなり倒れたフランス兵に足を掴まれる。

ロレンソ、悲鳴。

向き合うが、相手のフランス兵の力は尽きようとしている。

ロレンソ、大きく震えながらナイフを出し腕を上げる。

が、その手を下ろし。

ロレンソ 「僕には人を殺す勇気がないよ……」

ロレンソ、靴からパンを取り出す。

ロレンソ 「三日も前に支給されたものだからカチコチだけど」

フランス兵、受け取り食べようとすが力尽きてしまう。

ロレンソ 「君だって故郷に家族があるだろうに……」

ロレンソ、緊張の糸がほぐれ、膝をつく。

突然、近くで座り込んだ男が動きだす。

ロレンソ、再び悲鳴を上げ、のけ反る。

フリア 「安心して。スペイン人だ」

ロレンソ 「……生きてたのか」

フリア 「体を休めてた。この二日ばかり歩き通しで。驚かしたね」

ロレンソ 「ああ、とつても」

フリア 「(握手) バレンシアのフリアだ」

ロレンソ 「ビクトリアのロレンソ」

フリア 「ここで大きな衝突があつて。結局は連合軍が蹴散らしたんだが、精も根も尽き果ててね。ずっと飲まず食わずで来たもんだから」

ロレンソ 「君もか」

ロレンソ、フランス兵のパンを取り戻してフリアに差し出す。

ロレンソ 「まだたいして口をつけてないから」

フリア 「いいのか」

ロレンソ 「齒は丈夫だろうね。残り物の配給だから」

フリア、パンにかぶりつく。

フリア 「サン・セバスチャンの街は活気に満ちてるらしい」

ロレンソ 「北の街だね。今からそこへ」

フリア 「フランス軍がしんがり始めてるんだ」

ロレンソ 「しんがり？」

フリア 「撤退してること」

ロレンソ 「それじゃ、ピレネーの攻略に」

フリア 「それはまだ分からないな。いろんうわさが飛び交つてる。でもね、連合軍がピレネーに集結していることは間違いない。僕は絵描きだから、この歴史的な場面を残しておきたい」

ロレンソ 「とうとう戦いの終わる時が」

フリア 「君たちはまさに巨人を倒す英雄だよ」

ロレンソ 「巨人を倒す：英雄」

フリア 「そうとも、力を合わせ大きな一つの塊を蹴散らしてる」

ロレンソ 「僕はただの郵便馬車夫さ。しかも、馬もいなくなつたから、ただの郵便夫だね」

フリア 「今時、生真面目に前線に向かう郵便夫なんて。他にいないだろ」

ロレンソ 「仕方ないんだ。人を捜してる」

フリア 「人。身内かい。それとも友人」

ロレンソ 「いや。僕の片想いの相手の恋人」

フリア 「複雑だね」

ロレンソ 「そう。複雑な胸の内。急がないと。戦いの終わりが見えてるなら尚のこと」

市民兵たち、駆け込んでくる。

市民兵1 「逃げろ！フランスの小隊がこっちに向かつてる。逃げ」

ロレンソ 「フリア、立てるか」

フリア 「ああ」

市民兵2 「掴まれ。俺たちが肩を貸す」

市民兵、口々に叫びながらフリアを連れて退場していく。

ロレンソ、後続く。

倒れていたフランス兵、ロレンソの脚を掴む。

振り返るロレンソ。

逃げようともみ合う、その時、銃声。

フリア 「ロレンソ！」

ロレンソ、顔を撃たれて倒れる。

フランス兵、今度は完全に力尽きている。

他の市民兵が駆け込んでくる。

市民兵1 「来るぞ！急げ」

フリア 「ロレンソ！ロレンソ！」

市民兵、フリアを強引に連れて、退場。

数名のフランス兵、銃を構えて駆け抜けていく。

ロレンソの身体がわずかに動く。

が、再び倒れて。

鳴り止まぬ、砲撃や怒号の声。

暗転。

○パレス・オブ・ローズ

ローズたち、登場。

ローズ 「ロレンソは！ロレンソは！」

少年 a 「(右眼を押さえ) 分かりません。何の声も聞こえなくなった」

ケワイ 「撃たれたの！」

少年 a 「はい」

コロモ 「嘘でしょ……」

少年 a 「すみません……僕……何だか気が遠くなって……」

少年 a、倒れる。

コロモ 「ギャア……！」

ケワイ 「一寸！アンタ」

ローズ 「水を」

コロモ 「(おたおた) はい……」

ピアノ弾 「俺が」

ピアノ弾き、奥へと走り去る。

ケワイ 「(服で必死に煽っている) まさか、ロレンソがあんなことに……」

ローズ 「相当な衝撃だったのね」

コロモ 「あんな最期だなんて……」

ケワイ 「泣いてる場合！」

コロモ 「だつてさ」

ケワイ 「ね、一寸、しっかり。気がついた」

少年 a 「僕……」

ローズ 「喋らなくていいわ」

少年 a 「いえ……大丈夫」

ケワイ 「いいから。無理しない」

少年 a 「僕は今、とても大事なものを見ました」

ローズ 「大事なもの」

少年 a 「僕の右眼が誕生した瞬間です」

ローズ 「あなたの」

少年 a 「僕の右眼はこの時、生まれました」

コロモ 「ロレンソは右眼を」

ケワイ 「そうか。あなたの右眼。この時にロレンソから離れて」

コロモ 「ロレンソは死ぬ前に右眼を失っていたのね」

少年 a 「失っても、魂が宿って残りました。それに」

ローズ 「それに」

少年 a 「感じるんです。まだ。ロレンソの息を」

ローズ 「ロレンソ、生きてるの」

少年 a 「感じます。息を。おそらく今、彼の意識はもうろうとして、はっきりしていないはず。だから、僕には息しか感じてこない」

水がめを持ったローズが通り過ぎていく。

少年 a 「それに、ローズが」

ローズ 「ローズが」

少年 a 「ローズが…(咳き込む)」

ローズ 「落ち着きなさい」

水がめを持ったローズ、奥から来る人の気配を感じている。

ローズ 「水を」

ケワイ 「(奥に) 水を！」

少年 a、奥を見て。

照明、CHANGE。

○教会前の広場

杖をつく老兵、足を引きずりながら登場。

老兵 「水を…」

ローズの前で力尽きたようによろめき腰を着く。

ローズ 「兵隊さん！」

ローズ、水を飲ませてやる。

老兵 「ひどい戦いだっただよ。(足を投げ出し) おかげで除隊だ」

ローズ 「ケガを」

老兵 「なあに。これくらいなら、また仕事に戻れるさ」

ローズ 「仕事は何を」

老兵 「教会のオルガン弾き。ああ、美味い。ありがとよ、生き返った」

ローズ 「一つ聞きたいことが」

老兵 「何だね」

ローズ 「私の恋人も戦に」

老兵 「恋人」

ローズ 「最前線にいるはずなの」

老兵 「名前は」

ローサ 「エドムンド」

老兵 「エドムンド…」

ローサ 「どうしたの。知ってるの」

老兵 「まさかとは思うが、あんたローサかい」

ローサ 「ええ。ローサよ。私はローサ」

老兵 「そうか…。まさか、こんな所であんたに出くわすなんて」

ローサ 「知ってるのね！あなた、私の大事な人を。それで、私の名前を聞いたのね」

老兵 「ああ。確かに知ってる。まさかね、まさかあんたに会えるなんて。だってそうじゃないか。俺の目の前にいるのは、あの有名なローサなんだから。伝説のローサに」

ローサ 「伝説？私が…」

老兵 「そうとも。伝説だよ。最前線に出て、お前さんの名を知らない者はない」

ローサ 「あの人ね！エドムンドが話してるのね。私の事を」

老兵 「いや、そうじゃない。エドムンドは死んだよ。とっくの昔に」

間。

ローサ 「何ですって…！」

老兵 「もう五年以上も前の話だ…」

ローサ 「嘘よ…。何言ってるの！」

老兵 「気の毒だが間違いない。俺はその時、同じ部隊にいたんだからね。あれは激しい戦闘で」

ローサ 「嘘」

老兵 「隊のほとんどはやられたよ。退却して生き延びるので精一杯さ。俺だってそのうちの一人。今から思えば、よくあの中を潜り抜けて、未だにこうして生きていられるもんだ。それくらいひどい戦闘だったんだよ。だから、形見を持ち出す時間すら。第一、みんなまともに大砲を食らって、誰が誰だかなんて…。それくらい、あの時の戦闘は…」

ローサ 「でも…でも、エドムンドの話はいつも聞いてるわ。本当よ、本当なんだから」
老兵 「ロレンソだね」

間。

ローサ 「どうして、それを」

老兵 「そうか。やはり、噂は本当だった」

ローサ 「噂…」

老兵 「前線に送られりゃ、ロレンソを知らない者はいない。何故だか分かるかい。あいつはいつだって前線にいるからだよ」

ローサ 「どういうこと」

老兵 「前線にいれば次々に新しい奴らが送られてくるだろ。一番情報が集まる。エドムンドの死骸は見つからなかった。だから、生きてるかもしれないって言うんだ、あいつ。どうにか逃げ延びて、別の隊で戦っていると。だから、あいつは退きやしないんだよ。いつだって一番前に姿を現して。一つの隊が交代になると、

手紙を持って数週間姿が見えなくなる。そして、またある日ひよっこり顔を出す。新しい前線の部隊にね。そして、エドムンドを知らないか。あの男を見なかったかと訊ねて回るのさ」

ローサ 「…」

老兵 「エドムンドは死んだよ。悲しいことだが、そいつは間違いない。そう言っても、

あの男は」

ローサ 「まさか…エドムンドが…。それも、そんなに前から。ロレンソが行き先を変えてこの街に戻ってきた時にはもう。だったら、初めからじゃないの…！」

老兵 「悲しいことだが…この俺が証人だ」

ローサ 「私…すべてが砕けてしまった。心の中の支えも夢も…すべて」

ローサ、絶叫。

やがて、泣き崩れて。

ドラ、登場。

(夢破れて)

♪ 愛の終わる日が くと知らずに

さだめ信じ 待ったわ

涙のみ ひたすら耐え

いつか抱かれる その日まで

そんな夢だけを もち続けたわ

それしか すがれなくて

夢破れて すべて消えた

わたしは 何をしていたの

愚かすぎた わたしの愛

報われるとき くと信じて

あなたの影 追っていたと

あまりに残酷じゃない

まさかこんな日が くと思わず

祈りつづけ きたのに

わるい予感 いつも消して

命つなげて 生きてきた

すべて意味のない ただの戯れ言

いまさら 分かるなんて

夢破れて すべて消えた

わたしは 何をしていたの

虚しすぎる わたしの愛
意味なきときの しもべだったの
幻だけ 追っていたと
あまりに残酷じゃない

今日という日が この世のおわり
わたしの愛も 死んだわ
ひとりきりの 暗やみなら
歩みすすめる 気もないの

枯れていくところ 無情の風よ
あなたは もういない
夢破れて すべて消えた
わたしは 何をしていたの

ドラ、崩れたローサに近づいて。

ドラ 「私、あなたに謝らなければ…」

ローサ 「知ってたの」

ドラ 「…許して頂戴」

ローサ 「ロレンソから口止めを」

ドラ 「兄さんが知る前から、私、分かった。自分のカードで」

ローサ 「それなら何故。余計に傷つくとは。こんな形で知ることになって！」

ドラ 「…ごめんなさい」

ローサ 「私はどうなるの。想像はついたはずよ。人の気持ちをもてあそんで」

老兵 「あなたの気持ちは分かるよ、ローサ。だがね…」

ローサ 「(泣き崩れ) 分かるもんですか！私が今、どれほど傷ついて」

ドラ 「そうでしょうね。でも、ローサ。これだけは分かかって欲しいの。兄はね」

ドラ 「ロレンソの話なんかやめて。私、聞きたくもない」

老兵 「兄はね、本気でエドムンドを探してるのよ。今でも」

ローサ 「そいつはホンとだぜ。いくら言っても分かるうとしない。近頃じゃ、街なかに

転がる死体の中までかき分けて。一体。一体。万が一に出くわしやしないかと」

ローサ 「…何ですって」

老兵 「今日もあいつは、ひどい最前線で、いるはずのないエドムンドを捜してるんだ。

大砲や戦火をかくぐりながら、一人黙々と、いるはずのないエドムンドを捜

してる。みんな、あんたのために」

ローサ 「…」

老兵 「戦場の男どもは誰でもあいつを知ってる。あいつがあんたのために命をかけて
いることを。あんなに小さな体の、銃だつてろくに使えなただの郵便夫が、

最前線の男たちの誰からも軽く見られやしない。あいつの姿を通して、一人一人があらためて誓いを立てるから。俺たちみんな、愛のために戦うんだってことを」

ローサ

「…」

老兵

「俺は勇気をもらったね。あいつから」

ローサ

「…」

老兵

「あんたの気持ちは分かるよ、ローサ。だけど、忘れないでもらいたいんだ。あんたのために自分を捨てて、すべてを捧げてる男がいるってことを」

ローサ

「…」

老兵

「行くよ。今度の前線は最後の正念場だ。今まで誰も見たことがないくらいでかい戦になってる。こいつを守りさえすれば、この国は勝つことになるだろう…。ロレンソはその中にきつといる。生きていられる保証はないが。それでも、あいつは…。なあローサ、頼むから忘れんでくれ。そんなあいつがいたことを。な。でなきや、俺たちみんな、これまで戦ってきたことが嘘のように虚しく思えて。だから、な。頼むから」

老兵、去る。

ドラ

「私も行く」

ローサ

「…」

ドラ

「この戦争は間もなく終わる。私のカードによると。だけど、兄さんはもう駄目ね。それもカードに出てるから…」

ローサ

「…」

ドラ

「今度は私が亡骸を探すわ。あなたを傷つけたこと、一生かけても謝りたい。でもね…あの兵隊さんが言ったこと、みんなホンとよ。兄は命を賭してあなたのことを…。分かってあげて、せめてそれだけは」

ローサ

「ドラ」

ドラ

「さよならよ。本当にごめんなさい。長い長い時間をかけて、いつかどこかで会いますよ。それもカードに出てるから…」

ドラ、静かに退場。

ローサ、一人立ちつくしている。

照明、CHANGE。

○パレス・オブ・ローズ

携帯電話の着信音。

ローズたち、登場。

ピアノ弾きとコロモ、ローズの側に出て来る。

ピアノ弾

「郊外なんだが古い映画館があつてね、とても小さな。ロードショーもかからずに、埃をかぶって閉じたままなんだ。その友達が言うにはね、あんたのためだったら好きに使っていいって。蜘蛛の巣が張って、椅子や壁もみんな壊れて、とてもあんたが城をかまえて歌う場所でもないんだが」

ローズ

「え…」

ケワイ 「一寸、待ってよ。そんな話、今まで」

ピアノ弾 「(携帯電話を手に) 今、支配人から返事が」

コロモ 「実際、見てもらってるの」

ケワイ 「何、アンタも知ってるわけ。支配人がどこに行ってるのか」

コロモ 「アンタ、話す前に飛び出して行ったんじゃない」

ケワイ 「何、そうだったのアレ。それならそれで、アンタ」

コロモ 「いつだって、せっかちなよ、アンタ」

ケワイ 「何さ! (舌出し) ベー」

コロモ 「(やり返し) ベー」

ケワイ 「(やり返し) ベー」

コロモ 「(やり返し) ベー」

ピアノ弾 「おいおい、期待してくれちゃ困るぜ、本当にとっても小さな箱なんだ。実際、見に行った時は、俺ですら驚いたくらいさ。だから、本当ならローズに話すまでもないと思ってた。しかし…」

ケワイ 「いいって言うの、支配人」

コロモ 「内装を全部変えれば」

ピアノ弾 「やりようならいくらでもあるって言うんだ。あのオーナーのじいさん」

ケワイ 「何であのハゲチャビンがここにきて出て来くるわけ」

コロモ 「出資者よ。ここの皆と一緒に」

ローズ 「そんな…」

コロモ 「ローズさん、正直に考えてくれていいんです」

ピアノ弾 「情には流されてくれるな。誰のためでもない自分のために…そう思えるなら。俺たちもそれに乗ったんだから」

皆がローズに注目。

ローズ 「…」

ケワイ 「ローズさん! アタシ、一生懸命、埃を払います。そうして、隅々まで磨きあげます。椅子だって運びます」

コロモ 「私だって、釘を打ちます。照明だってつなぎます」

ケワイ 「ローズさん」

コロモ 「ローズさん」

ピアノ弾 「ローズ」

声 「ローサ」

ローサ 「(振り返る) ロレンソ!」

照明、CHANGE。

○教会前の広場

右眼を布で覆い、よろよろと歩き来る、ロレンソ。

ローサを見て安心したように崩れ落ちる。

ローサ、駆け寄って抱き上げる。

ローサ 「ロレンソ…!」

ロレンソ 「ああ…ようやくたどり着いた」

ローサ 「あんた、その眼…！やられてしまったの」

ロレンソ 「大丈夫さ、ローサ。この目は、置いて来たんだ」

ローサ 「置いて」

ロレンソ 「そうとも、あの戦場にね。ここからでもはっきり見えるように。エドムンドの活躍する姿が」

ローサ 「(抱きかかえる) ロレンソ。あんた馬鹿よ。こんなになって」

ロレンソ 「ローサ…」

ローサ 「こんなにひどい…ひどいことになって…」

ロレンソ 「いいのかい」

ローサ 「何」

ロレンソ 「僕を抱いてくれてる。誰にも触れさせなかった君の腕に」

ローサ 「馬鹿ね…いいのよ。あんたは特別」

ロレンソ 「ああ！見えるよ、ローサ！エドムンドがまたやった。ナポレオンの軍が次々に撤退していく。ピレネーの山をエドムンドが駆け抜けてる」

ローサ 「ロレンソ」

ロレンソ 「ああ、見えるよ。エドムンドの姿が。はっきりと鮮やかに映し出してる。僕の置いて来た右眼が。ほら、エドムンドが右手を高々と挙げてるよ。心の中で君を想いながら」

ローサ 「ロレンソ」

ロレンソ 「僕の右眼ははっきりと映し出してる。君の愛しい人をはっきりと映し出してる。

きつともうすぐここへ帰るよ。きつともうすぐ」

ローサ 「そう。でもね、そんなのもうどうだっていいわ」

ロレンソ 「どうだっていい…」

ローサ 「そうよ」

ロレンソ 「何故…。君のエドムンドが」

ローサ 「(しっかりと見つめ) もういいの。私にはあんたが。私の愛しい人はあんたよ」
間。

ロレンソ 「僕…」

ローサ 「そうよ」

間。

ロレンソ 「また、混乱してるね」

ローサ 「そうじゃない」

ロレンソ 「だって…」

ローサ 「気づいたの。やっぱり私にはあんたが一番大事。今度は本当よ」
間。

ロレンソ 「君は…優しい人だね」

ローサ 「本当よ。本当なの。ロレンソ」

ロレンソ 「だって…僕は君に何一つしてあげられなかったよ」

ローサ 「ロレンソ」

ロレンソ 「そうとも。僕は君に何もしてあげられては。おまけにこんなケガまで負って：もう手紙を受け取ることを…」

ローサ 「何を言うの。あんたは私に全てをくれたじゃないの。手紙はみんな受け取った。熱い言葉も。優しい心も。みんなみんな受け取った。私：気付くのが遅すぎた」

ロレンソ 「優しい人だよ、ローサ：君という人は。僕は本当に：何も出来なかったというのに」

ローサ 「ロレンソ！眠っちゃダメ」

ロレンソ 「東洋では、人が死んでも魂だけは永遠に残って、次の命に生まれ変わるそうだよ…。それなら僕は：僕の残してきた右眼は：生まれ変わっても君のためにエドムンドを探してあげよう。僕の右眼は誰かに生まれ変わって、探し続けよう…」

ローサ 「それはもういいの。いいのよ。ねえ、だったら私を探して。どんなに遠くに離れていても、必ず私を探して頂戴」

ロレンソ 「本当かい：君は本当に僕のことを…」

ローサ 「本当よ。私の心の声。本気よ！愛してるわ」

ロレンソ 「ああ：何て僕は幸福な。よし。きつと、君を探そう。君の歌声が目印になる」

ローサ 「きつと。約束よ。ロレンソ」

(愛するあなたへ)

♪

(ロレンソ) いつでも この胸 あふれる 愛で満たした

とおい記憶も 色あざやかに

今もまた 思い出す

あなたは わかさに はずんで いつも輝く

あの日の海辺 出逢った日から

ぼくはもう とりこさ

愛する あなたへ

どうか 願いとどけと

何度おもった ことだろうか

ああ 想いが 今かなう

はかない命 消えいく このときに

(ローサ) すこしも 知らずに あなたを 苦しめたのね

わたしのために すべてを捧げ

愛のため 生きたひと

あなたは つよさと 勇気を 持ちつづけたわ

無償の愛で わたしをつつみ

いのちさえ 投げうつ

愛する あなたへ

どうか わたし許して

ほんとうの愛 今気づいたわ

ああ 終わった からじゃない

あなたが好きよ ころから そう言える

(二人)

どうか 願いかなえて

たとえわずかな ときであっても

ああ ふたりは 結ばれる

あなたを愛す ころから そう言える」

ローサ 「ロレンソ！目を開けて、ロレンソ！」

ロレンソ 「苦しげに力振りしぼり」ああ、遠のいていく。君に僕の彫った馬車を贈りたかった。時間をたっぷりかけて細かな細工のランドー型の馬車を。金だって銀だってふんだんに使って、それは美しい出で立ちで」

ローサ 「ええ、乗りたいわ。私に作って頂戴。お願いだから」

ロレンソ 「サイドにはいつか贈った薔薇のリースを。街中の貴族でも誰ももってやしない。君だけにローサ、捧げた馬車を……」

ローサ 「ロレンソ」

ロレンソ 「ああ、遠のいていく。残った方の片側の目で、君の瞳を焼き付けたのにな」

ローサ 「ロレンソ！ロレンソ」

ロレンソ 「僕のローサ：優しいローサ：きつと探すよ……だから声を……からさないで」

男たちが走り抜けていく。

男1 「終わった！終わったぞお！」

ローサ 「どうしたの」

男2 「終わったんだ。フランス軍が撤退していった」

男3 「俺たちは守り抜いた」

男4 「俺たちは勝ったんだ！戦争が終わったぞ！」

ローサ 「勝ったんだって。ロレンソ、戦争が終わったって」

ロレンソの息はもうない。

ローサ 「ロレンソ、ロレンソ！ああ、ロレンソ！」

ローサ、ロレンソの胸に顔を埋めて。

ローズと少年 a、浮かび上がる。

少年 a

「僕が見ている赤い風景は戦場の姿ではないのかもしれませんが。僕の右眼が映し出すのはロレンソの情熱です。彼が探しているのはエドムンドという英雄ではなく、ローサの希望そのものです。それがロレンソからローサへの愛です。その愛が永遠に受け継がれて僕の右眼に宿ったに違いありません。だから、今そ

の役目を終えて、僕の右眼を使って映し出していた風景はゆっくりと消えていきます。ローズさん！僕の役目は終えました。ロレンソの想いは伝えきりました。ね！それでしょ！」

ローズ 「親愛なるいにしえのあなた、この声が届くでしょうか。私は今、あなたの影を感じています。遥かに長い道のりを、決して切れることなく繋がった、そのあなたの願いもそのままに私は今日も歌っています。私はあなたを受け継いでいます」

ローザ 「ええ。聞こえているわ。親愛なる遠い異国のあなた。今世の思いは汚れぬよう、この赤い土に埋めるから。私の心が死なず、生まれ変わっているなら今度こそ、どうかそれを優しく抱いて。きつと心が通い合って、この愛しい人と出逢えるはず。だから、歌声をからさないで。あなたの歌声は不思議な力を持っているはず。親愛なる遠い異国のあなた、私の声が、私のこの魂の願いが聞こえますか！」

ローズ 「(ハッキリと) はい！」
コーラスイントロ、殴りこむ。

(赤い大地に咲く薔薇の)
(ローザとローズ)

「♪時のなか 彷徨いびと
たとえ一人 捨て去る この身も
流れては すぎる星よ
願い叶え 運命(さだめ)の 行く道

ああ 光は 闇にのまれても
風の 匂いを たしかに
浮かぶ涙 求めあう

どうか 祈りよ 時をこえて
さがす あなたの 声がかれても
ふかい 魂の
呼ぶ声に 耳を かたむけて

わたしの すべてを 捧げましょう
それが最後の 約束だから
赤い大地から 咲く薔薇の
とどけ 命よ 遙か

彷徨える 時の在りか
夢はいつか 微睡み 覚めても

色をかえて 満ちる月
長い夜は とけない 魔性

ああ 光は 姿かくすけど
伝い 求める 指さき
ふれる明日を 信じあう

どうか 祈りよ 時をこえて
とわの 奇跡に 果てぬ息吹よ
こころ 輝けば
愛のうた あなた 忘れない

わたしの すべてを 捧げましょう
それが最後の 約束だから
赤い大地から 咲く薔薇の
とどけ 命よ 遙か

間奏。

少年 a 「これが右眼からの伝言です。時を超えたメッセージです。あなたに全てを伝え
た右眼はホラ、元の色に戻って。ローズさん、連れてって下さい。僕はまだ子
供だけど、きつと何かの役に立ちます！」

突如、舞台後方が大きく開く。

光に包まれた中にきらびやかなランドー型の馬車が姿を現す。

扉を開け、ローズを待つのは支配人とビルのオーナー。

そして、パレス・オブ・ローズの従業員たち。

周りを囲むように馬車職人たち。

馬車職人 「ローサ：ローサ：セニョリータ」

オーナー 「ローズ！出かけるよ」

コロモ 「さあ、用意が出来ました」

ローズ 「用意って、何の」

ケワイ、馬車を降りてロレンソを抱きかかえる。

支配人 「何の？新しい城に向かう用意に決まってるじゃない」

ケワイ、ロレンソを馬車のシートに乗せる。

ローサ、後に続いてシートに座る。

ローズ 「新しい城」

コロモ 「観客はすぐに集まります。みなさん噂を聞きつけて」

ケワイ 「伝説の歌姫なんて看板、捨てておしまいなさい！あなたは進み行く馬車の、ま
だ途中じゃありませんか。伝説なんかになりたいですか。アタシたちはそんな
もの待ってやしません！アタシたちはね、いつだってあなたの歌声に酔いたい

んです！」

ローズ 「私、どうして歌いたかったのかやっと分かった。どうして歌わずにはいられないのか。どうして歌だけが私に残ったのか、やっと分かった」

ピアノ弾 「そうさ。新しい城で。パレス・オブ・ローズはなくなならない」

ローズ 「パレス・オブ・ローズ」

コロモ 「そうです。あなたの城」

ローズ 「パレス・オブ・ローズ！パレス・オブ・ローズ！いいわ。乗った、その話」

ケワイ 「さあ行きましょう」

少年 a 「(リースを持ち) こいつを！ロレンソのリース」

ローズ、薔薇のリースを手取る。

(ローズ) 「♪

どうか 祈りよ 時をこえて

とわの 奇跡に 果てぬ息吹よ

こころ 輝けば

愛のうた あなた忘れない

わたしの すべてを 捧げましょう

それが最後の 約束だから

赤い大地から 咲く薔薇の

とどけ 命よ 遙か」

ローズ、リースを持ち、馬車に向かう。

演奏は最高潮に。

ロレンソを挟み、乗りこんだその姿、一枚の絵のように。

ローズ 「ねえ！その劇場の名は」

支配人 「変わってるの。オーナーの名前を取ってね、ドラという。兄妹でやってるの」

ゆっくりと照明は落ちて。

残り香が漂う雰囲気ならなおさら…。